

藤沢市立学校適正規模・適正配置に関する基本方針
(素案)

(たたき台)

2021年(令和3年)6月

藤沢市立学校適正規模・適正配置検討委員会

目 次

1	はじめに	1
2	学校に関する現状と課題	
(1)	児童生徒数の推移	2
(2)	学校施設の老朽化の状況	3
(3)	過大規模校・過小規模校への対応	5
(4)	支援教育の推進に関すること	7
	ア 白浜養護学校の教室不足	
	イ 特別支援学級の全校設置	
(5)	少人数学級に向けた取組	10
(6)	小中一貫教育の取り組みに関すること	11
3	学校適正規模・適正配置の基準	
(1)	学校規模について	13
(2)	通学距離について	14
(3)	通学区域について	15
4	学校適正規模・適正配置を検討すべき対象校の基準	
(1)	学校規模について	16
(2)	通学距離について	16
(3)	通学区域について	16
(4)	学校施設の老朽化に関すること	17
(5)	支援教育の推進に関すること	17
(6)	小中一貫教育の取り組みに関すること	17
(7)	地域との連携	17
5	学校適正規模・適正配置の取組方法	
(1)	基本方針の策定と位置付け	18
(2)	実施計画の策定と位置付け	18
(3)	実施計画策定後の各地区における取り組み	19
(4)	基本方針等の見直し	20
	参考資料	21

1 はじめに

本市では、1970年（昭和45年）に児童数は約18,800人、生徒数は約6,800人に対し、市立小学校は19校、市立中学校は9校、市立特別支援学校は1校の合計29校が設置されていました。

その後、都市部への人口集中の影響もあり、人口や児童生徒数は増加し、1980年（昭和55年）に児童数は約32,600人、市立小学校は29校となり、さらに1985年（昭和60年）に生徒数は約17,300人、市立中学校は18校に増えるなど、1970年代から1980年代にかけて市立学校の建設が続きました。

現在、本市においては児童生徒数の減少傾向は見られませんが、今後、本市においても徐々に児童生徒数の減少傾向となる見込みです。

一方で、一部地域においては人口集中による過大規模校が存在し、仮設校舎の設置により対応を図っていますが、過大規模が解消されない学校があるなど、市内において地区ごとに格差が生じているほか、学校施設の状況は、老朽化が著しい状況です。

さらに、法律改正により小学校における全学年による少人数学級が段階的に実施されるため、必要教室数が増えることや小中一貫教育に向けた取組を進める必要があり、社会状況の変化に合わせ、子どもたちの新しい時代の学びの環境に対応できるようにする必要があります。

以上のようなあらゆる課題を解決していくに当たり、教育委員会は、2021年（令和3年）5月に学識経験者、地域住民の代表、保護者の代表、学校関係者で構成される「藤沢市立学校適正規模・適正配置検討委員会」を設置しました。

検討委員会では、これからの時代に求められる教育内容を勘案しつつ、児童生徒数の減少や学校施設の老朽対策などの視点を踏まえ、学校規模の適正化への対応を図り、子どもたちの教育環境の改善に取り組むため、これからの藤沢市立学校の学校施設の適正規模・適正配置についての基本的な考え方を協議した結果を教育委員会に答申しました。

教育委員会は、この答申に基づき「藤沢市立学校適正規模・適正配置に関する基本方針」を策定し、この基本方針に基づいて、「えがおあふれる学校づくり」に向けて、子どもたちの教育環境の改善に取り組みます。

2 学校に関する現状と課題

(1) 児童生徒数の推移

令和3年度における本市立小学校の児童数は23,135人で、令和6年度まではほぼ横ばいで推移しますが、令和7年度から徐々に減少傾向に転じ、令和12年度(2030年)には約20,000人に、令和22年度(2040年)には約19,600人となる見込みで、令和37年度(2055年)には約19,400人となる見込みであり、令和3年度と比較すると約3,700人(約16%)減少する見込みとなっています。

また、令和3年度における本市立中学校の生徒数は10,779人で、令和11年度まではほぼ横ばいで推移しますが、令和12年度から徐々に減少傾向に転じ、令和15年度(2033年)には約9,100人に、令和22年度(2040年)には約8,500人となる見込みで、その後、僅かな微増傾向に転じ、令和37年度(2055年)には約8,700人となる見込みであり、令和3年度現在と比較すると約2,100人(約19%)減少する見込みとなっています。

このように本市における児童生徒数推計全体で見れば、児童数は令和7年度から、生徒数は令和12年度から減少傾向となりますが、令和3年度以降の地区ごとの推計を比較すると、小学校では、令和9年度の時点で、鶴沼、辻堂、六会地区はほぼ横ばい傾向であるのに対し、片瀬、湘南大庭、遠藤、御所見地区については2割程度減少する見込みであり、中学校では、令和15年度までの推計で、鶴沼、村岡、明治地区はほぼ横ばい傾向であるのに対し、善行地区で2割、湘南大庭、遠藤地区で3割、片瀬、御所見地区で4割程度減少する見込みとなっており、地域によって格差が生じる予測となっています。

なお、児童生徒数の見込みの算出については、小学校は令和9年度まで、中学校は令和15年度までは「令和3年度児童・生徒数推計(以下「児童生徒数推計」という。)」値であり、それ以降の見込みについては、児童生徒数推計値に「2017度藤沢市将来人口推計」(平成27年実施国勢調査に基づくもの)の地区別人口増減率を反映させたものです。

【資料1：児童生徒数の推移】

(作成中)

【資料 2 : 児童生徒数の推移】

(作成中)

(2) 学校施設の老朽化の状況

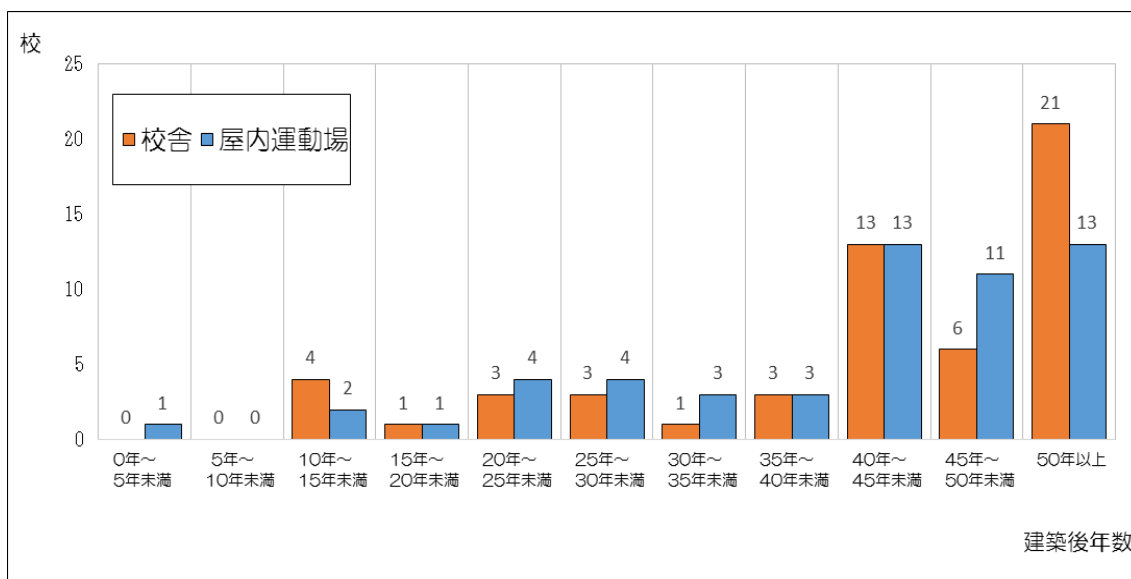
本市の学校施設の老朽化の状況としては、建築後 50 年を経過した校舎棟を保有する学校は 21 校、建築後 40 年では 40 校となっており、老朽化が著しい状況となっています。(参考資料 P 27「3 学校の老朽化の状況」参照)

多くの学校の校舎棟は、児童生徒の急増の際に増築されるなど、一体の建物であっても建築年次が異なっており、耐震補強済みの旧耐震基準の建物と新耐震基準の建物が混在している学校も数多く存在します。

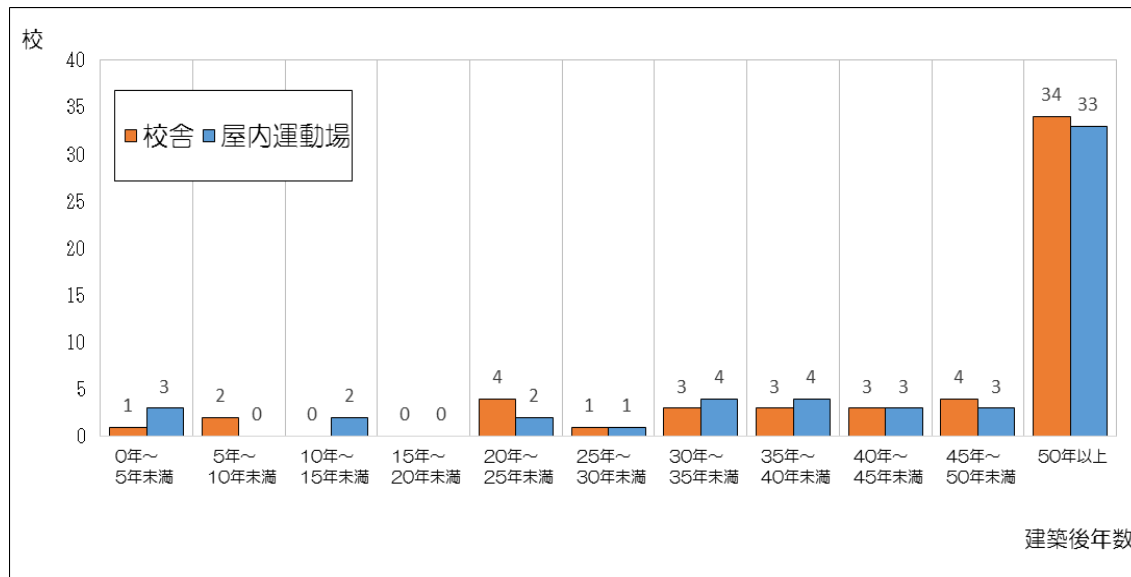
また、屋内運動場についても、建築後 50 年を経過した学校は 13 校、建築後 40 年では 37 校となっており、校舎棟と同様に老朽化が進んでいます。

今後、学校施設の老朽解消の対策として、「学校施設再整備基本方針」及び「学校施設再整備実施計画」に基づき、改築や長寿命化改修といった再整備事業を計画的に進めていくことが必要です。また、再整備事業の実施にあたっては、学校適正配置における方針や計画との調整を図りながら進めていく必要があります。

【資料 3-1 : 最も古い校舎及び屋内運動場の建築後年数ごとの学校数】
 (2021年(令和3年)4月現在)



【資料 3-2 : 最も古い校舎及び屋内運動場の建築後年数ごとの学校数(10年後)】
 (2031年度(令和13年度)想定)



※「藤沢市立学校施設再整備第2期実施計画」に基づく再整備事業を計画どおり実施した場合

(3) 過大規模校・過小規模校への対応

本市におきましては、令和3年5月時点で辻堂小学校（35学級）と鵜洋小学校（35学級）の2校が、31学級を超える規模の学校、いわゆる「過大規模校」となっています。

過大規模校についてはクラス替えがしやすい、切磋琢磨する機会が多いなどの面もありますが、教室数の不足により、一部の児童については仮設校舎で授業を受けるなど、教育環境に支障をきたしている面があり、過大規模解消に向けた取組が求められています。

一方、小学校で5学級以下、中学校で2学級以下の小規模の学校（以下「過小規模校」という。）は、令和3年5月時点で、本市においては存在していないものの、将来的な少子化を見据え、今後の推移を注視していく必要があるものと思われまます。

【資料4：学校規模別一覧（特別支援学級を除く）】

令和3年5月現在

地区名	学校名	児童数	学級数	学校規模
片瀬	片瀬小学校	741	23	適正規模
	片瀬中学校	445	12	適正規模
鵜沼	鵜沼小学校	909	27	大規模
	鵜洋小学校	1,215	35	過大規模
	鵜南小学校	524	18	適正規模
	鵜沼中学校	827	22	適正規模

辻堂	辻堂小学校	1,256	35	過大規模
	八松小学校	712	23	適正規模
	高砂小学校	566	18	適正規模
	浜見小学校	387	12	適正規模
	湘洋中学校	809	21	適正規模
	高浜中学校	410	12	適正規模
	白浜養護学校	145	41	—
村岡	村岡小学校	525	18	適正規模
	新林小学校	571	18	適正規模
	高谷小学校	884	25	大規模
	藤ヶ岡中学校	767	20	適正規模
	村岡中学校	613	16	適正規模
藤沢	藤沢小学校	582	19	適正規模
	本町小学校	802	25	大規模
	大道小学校	664	20	適正規模
	大鋸小学校	792	24	適正規模
	大清水小学校	334	12	適正規模
	第一中学校	742	20	適正規模
	大清水中学校	294	9	小規模
明治	明治小学校	792	24	適正規模
	羽鳥小学校	1,048	30	大規模
	明治中学校	609	18	適正規模
	羽鳥中学校	528	15	適正規模
善行	善行小学校	406	13	適正規模
	俣野小学校	289	12	適正規模
	大越小学校	613	19	適正規模
	善行中学校	430	12	適正規模
湘南大庭	大庭小学校	447	14	適正規模
	滝の沢小学校	573	19	適正規模
	駒寄小学校	514	18	適正規模
	小糸小学校	286	12	適正規模
	大庭中学校	544	14	適正規模
	滝の沢中学校	704	18	適正規模
六会	六会小学校	974	28	大規模
	亀井野小学校	635	19	適正規模
	天神小学校	505	17	適正規模
	石川小学校	630	20	適正規模
	六会中学校	804	21	適正規模
湘南台	湘南台小学校	770	24	適正規模
	湘南台中学校	561	15	適正規模
遠藤	秋葉台小学校	646	19	適正規模
	秋葉台中学校	362	10	小規模
長後	長後小学校	847	24	適正規模
	富士見台小学校	678	21	適正規模
	長後中学校	338	10	小規模
	高倉中学校	439	12	適正規模
御所見	御所見小学校	461	16	適正規模
	中里小学校	289	11	小規模
	御所見中学校	404	12	適正規模

(4) 支援教育の推進に関すること

ア 白浜養護学校の教室不足

白浜養護学校の現校舎については、平成9年に75名定員を想定して改築しましたが、令和3年5月の在籍者数は145名にのぼり、過大規模の状況になっています。

推計値では今後も児童生徒数が増え続け、令和10年度には現在と比較して13教室不足の見込みとなっているため、早急な対応が必要となっています。

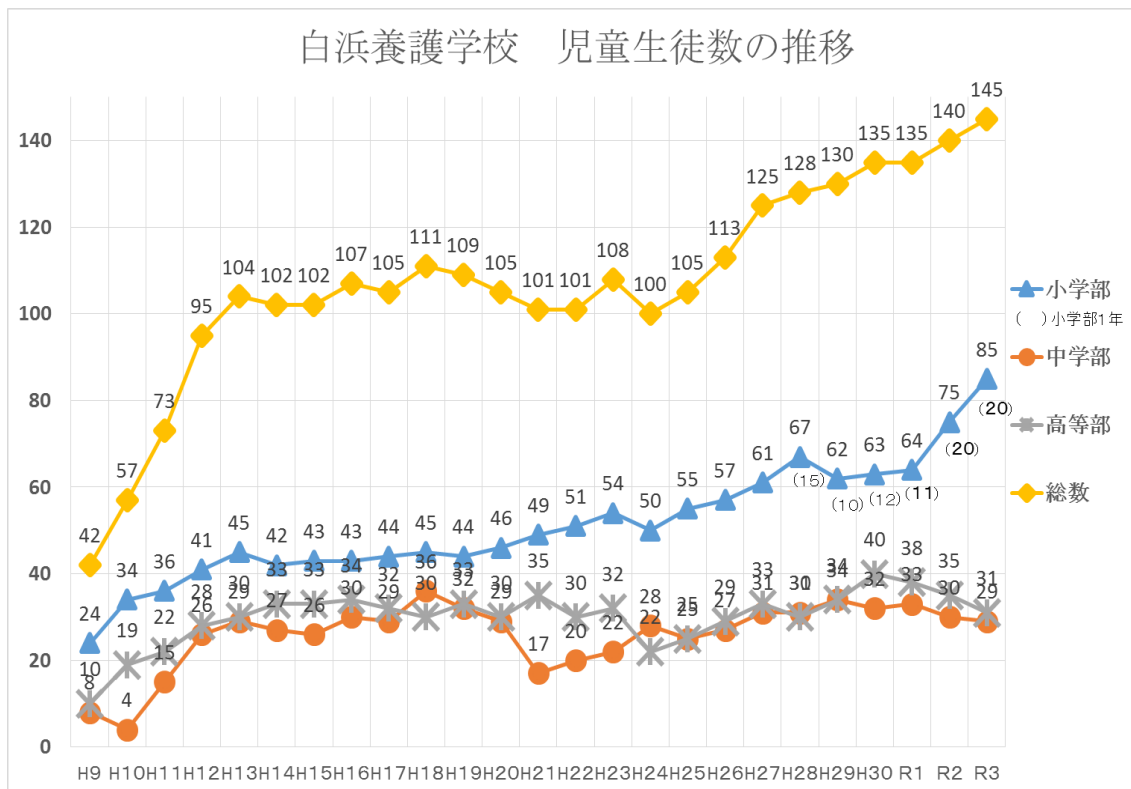
資料4は白浜養護学校児童生徒数の推移です。近年では、小学部新1年生の人数は多くて15人(H28年度)、その後横ばい傾向で、高止まりが続いているように見えますが、令和2年度・令和3年度ともに小学部新1年生の人数が20名となりました。過大規模・過密化の状況は増加の一途をたどっています。

また、教室不足解消のために、プレイルームや多目的ホール、教材室、美術室、音楽室、PC教室を普通教室として転用しており、これ以上転用可能な特別教室がない状況です。

現在、こうした状況を解消するため、令和3年度に学校敷地内に仮設校舎を建設し、令和4年度より共用開始を予定しています。

また、令和3年3月に神奈川県教育委員会が作成した「かながわ特別支援教育推進方針(仮称)」(素案)では、湘南地域の整備の方向として、県立特別支援学校の受け入れ枠を拡大することが記されており、今後、湘南地域にある知的障害教育部門の学校に肢体不自由教育部門が併置されることによって県立特別支援学校の受け入れ枠が拡大されれば、白浜養護学校に在籍する知的障がいと肢体不自由を併せ持つ児童生徒も通えるようになり、過大規模の解消につながることを期待されることから、神奈川県と緊密に連携を図りながら、新たに整備される県立特別支援学校の状況を踏まえ、白浜養護学校過大規模化への対応の方向性について整理していきます。

【資料 4：白浜養護学校 児童生徒数の推移】



イ 特別支援学級の全校設置

教育委員会では、市立小中学校全54校に特別支援学級の設置を目指していますが、令和3年5月現在、小学校では15校、中学校では5校が未設置となっており、全校設置には至っていません。

市内の特別支援学級に在籍する児童生徒の数は、学校教育法の一部改正により、特別支援教育を推進することが法律上明確にされた平成19年から比べると、およそ2倍に増えています。特別支援学級が未設置の学区に居住する児童生徒は、特別支援学級のある学区外の学校へ通学しており、早急にすべての小中学校に特別支援学級を設置していく必要があります。

特別支援学級を設置するためには、校内に最低でも2教室を必要とします。またプレイルームや多目的ホール、作業室といった教室や設備は豊かな教育活動には欠かせません。こうした環境整備は、藤沢市立学校適正規模・適正配置の考えの中にしっかりと盛り込まれる必要があると考えられます。

なお、本市における特別支援学級の設置状況は以下のとおりとなっています。

- ・「知的」「自閉症・情緒」学級設置校「2021年（令和3年）5月現在」
 小学校…20校（全35校中）
 中学校…14校（全19校中）
- ・特別支援学級設置率
 全県 小学校 96% 中学校 96%
 藤沢市 “ 57% “ 74%
 全県 :「2020年（令和2年）5月1日現在」
 藤沢市 :「2021年（令和3年）5月1日現在」

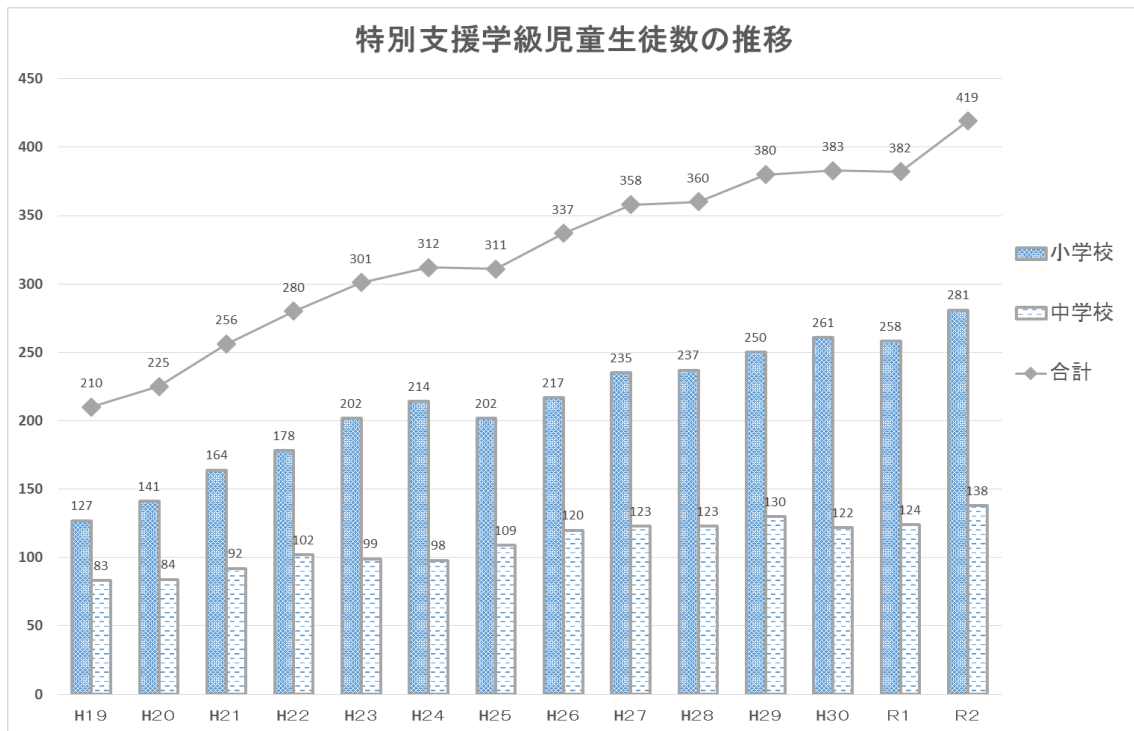
特別支援学級未設置校「2021年（令和3年）5月現在」

小学校（15校）				中学校（5校）	
藤沢	鶴沼	辻堂	鶴洋	明治	六会
八松	高砂	大越	羽鳥	湘洋	藤ヶ岡
新林	中里	大鋸	高谷	秋葉台	
小糸	大清水※1	石川			

※1・・・令和4年度開設校

【資料5：特別支援学級 児童生徒数の推移】

特別支援学級人数の集計【令和2年度 児童・生徒数推計（令和2年6月学務保健課）】									
市立学校	H19	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2
小学校児童数	22,285	22,913	23,051	23,118	23,142	23,083	23,246	23,320	23,234
中学校生徒数	9,770	10,429	10,492	10,545	10,615	10,722	10,636	10,479	10,588
合計	32,055	33,342	33,543	33,663	33,757	33,805	33,882	33,799	33,822
特別支援学級									
特別支援学級	H19	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2
小学校児童数	127	202	217	235	237	250	261	258	281
中学校生徒数	83	109	120	123	123	130	122	124	138
合計	210	311	337	358	360	380	383	382	419
特別支援学級児童生徒%									
	H19	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2
小学校%	0.57	0.88	0.94	1.02	1.02	1.08	1.10	1.14	1.18
中学校%	0.85	1.05	1.14	1.17	1.16	1.21	1.25	1.29	1.33
義務教育に しめる%	0.66	0.93	1.00	1.06	1.07	1.12	1.13	1.13	1.24



(5) 少人数学級に向けた取組

少人数学級については、少人数となることにより、一人ひとりの理解度や興味・関心を踏まえた学習指導を充実させることが可能となり、児童生徒指導上の諸課題に即した、より効果的な支援が図られることが期待されます。

現在、国では、これまでの新型コロナウイルス感染症対応を踏まえ、子どもたちに新しい時代の学びを支える環境を整備しており、令和2年7月には「経済財政運営と改革の基本方針2020」において、「少人数によるきめ細かな指導体制の整備」について閣議決定を行っています。また、これを受け、令和3年4月には「公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律の一部を改正する法律」が施行され、小学校については、全学年を令和3年度(2021年)から5年かけて段階的に35人までに引き下げることとなりました。

本市の少人数学級の検討にあたり、こうした法改正等を踏まえ、取組を進めていく必要があります。なお、本編における学級数については、小学校については35人学級、中学校については現行の40人学級と将来的に導入の可能性のある35人学級を想定して作成しています。

(6) 小中一貫教育の取り組みに関すること

義務教育9年間を見通した計画的・継続的な学力・学習意欲の向上や、いわゆる「中1ギャップ」への対応といった観点から、地域の実情に応じた小中一貫教育の取組が全国的に進められる中、9年間の義務教育を一貫して行う新たな学校の種類である「義務教育学校」の設置を可能とする改正学校教育法が成立し、平成28年4月1日に施行されました。

小中一貫教育においては、一人の校長の下で一つの教職員集団が一貫した教育課程を編成・実施する9年制の学校で教育を行う形態（義務教育学校）と、組織上独立した小学校及び中学校が義務教育学校に準じる形で一貫した教育を施す形態（小中一貫型小・中学校）の、大きく2つの形態が制度化されています。義務教育学校、小中一貫型小・中学校のいずれにおいても、施設一体型や施設隣接型、施設分離型といった施設形態にかかわらず設置を可能とされています。また、これらの学校においては、「4-3-2」や「5-4」など、指導上の工夫として学年段階を区切ることができます。

なお、国では学校の標準規模を、義務教育学校については18学級以上27学級以下、小中一貫型小・中学校については、小・中学校それぞれ12学級以上18学級以下と示しています。こうした状況を踏まえ、本市における小中一貫教育の検討にあたっては、学校規模が過大になることで様々な課題が生じないように、留意する必要があります。

【参考 小中一貫教育制度について】

小中連携教育

小・中学校段階の教職員が互いに情報交換や交流を行うことを通じて、小学校教育から中学校教育への円滑な接続を目指す様々な教育

小中一貫教育

小中連携教育のうち、小中学校段階の教職員が、目指す子ども像を共有するとともに、9年間を通じた教育課程を編成し、系統的な教育を目指す教育

義務教育学校

一人の校長のもと、一つの教職員組織が置かれ、義務教育9年間の学校目標を設定し、9年間の系統性を確保した教育課程を編成・実施する学校

小中一貫型小学校・中学校

組織上独立した小学校及び中学校が一貫した教育を施すかたちでそれぞれに校長、教職員組織を有する学校

併設型小学校・中学校

同一の設置者

連携型小学校・中学校

異なる設置者

いずれの学校も施設形態（一体型，隣接型，分離型）は問わない

3 学校適正規模・適正配置の基準

学校は、基礎学力を身に着けるだけでなく、子ども同士が豊かな人間関係を築き、社会性を身に付ける場でもあります。また、様々な形態による効果的な学習を行ったり、集団の相互作用による思考力の育成を図るためにも、活動に応じて少人数のグループから大きな集団まで、適切な規模の集団を組み、多様な教育活動を展開する必要があります。(P 19～21 参考資料「1. 学校規模に起因する課題」参照)

また、あわせて新型コロナウイルス感染症を踏まえ、教室に空間的ゆとりを確保しつつ、一人ひとりに寄り添った指導やケアを提供できる教育環境を確保する必要があります。

そこで、これらを踏まえ、より高い教育効果が得られると考えられる学校規模を「適正規模」として、次のように範囲を定めることとします。

なお、「適正規模」とは、あくまで標準的な規模であり、「適正規模」以外の学校が「不適正」ということではなく、それぞれの規模による特色を活かしつつ、より良い学校運営のための配慮を行っていきます。

(1) 学校規模について

学校教育法施行規則及び文部科学省作成の「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」を踏まえ、次のとおり本市における学校規模の基準を定めます。

小学校、中学校ともに12学級以上24学級以下 とする これにより、小学校では、1学年あたり2学級から4学級 中学校では、1学年あたり4学級から8学級 となります。

【参考1 標準学級数について】

学校教育法施行規則第41条では、「小学校の学級数は12学級以上18学級以下を標準とする。ただし、地域の実態その他により特別な事情があるときはこの限りではない。」としています。(中学校については同法施行規則第79条で準用)

【参考2 公立小学校・中学校における適正な学校規模について】

文部科学省では、従来から25学級以上の学校を大規模校、31学級以上の学校を過大規模校とした上で、過大規模校については速やかにその解消を図るよう、設置者に対して促してきており、地域によっては、このことを踏まえ、国の

基準である12～18学級を下回る場合の基準と併せて、標準を超える規模を分類して独自に大規模校や過大規模校の目安を設定し、必要な対応を検討している事例も見られます。(平成27年1月27日文部科学省「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」より抜粋)

<学校規模の目安>

小学校学級数	中学校学級数	状態
1～5学級	1～2学級	過小
6～11学級	3～11学級	小規模
12～24学級	12～24学級	適正
25～30学級	25～30学級	大規模
31学級～	31学級～	過大規模

(2) 通学距離について

本市では、市域の大半が市街地であり、その交通事情等の状況を踏まえると、自転車通学は困難であり、徒歩による通学を原則とします。徒歩での通学を前提に、児童生徒の体力、生活に対する影響などを考慮し、望ましい通学距離は、小学校では片道おおむね2km以内、中学校では片道おおむね3km以内を目指します。

【参考】国の通学距離の考え方

義務教育諸学校等の施設費の国庫負担等に関する法律施行令第4条（適正な学校規模の条件）では、「通学距離が、小学校にあつてはおおむね4キロメートル以内、中学校及び義務教育学校にあつてはおおむね6キロメートル以内であること。」として定めています。

また、文部科学省「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」において、同法施行令に基づき通学条件を通学距離によって捉えることが一般的であること、通学距離の基準を定めている自治体もあるもののそのほとんどが上記以内又はそれ以下の距離を基準として定めていること、小学校5年生と中学校2年生を対象に通学距離とストレスとの関係を調べた研究によると、上記以内の通学距離であればストレスが大幅に増加することが認められなかったことなどから、当該距離を基準とすることに妥当性があると示しています。

(3) 通学区域について

学校統廃合を含めた通学区域の見直しを進めるうえで、通学環境の安全確保は大変重要です。安全な通学路の設定とあわせ、通学路の安全点検、地域との連携による見守り活動の実施、子どもたちへの安全教育などの取組を総合的に実施し、安全安心な通学環境の整備を目指します。また、通学区域の設定にあたっては、次の事項を基本として検討します。

<通学区域設定にあたっての配慮事項>

- ・通学距離（時間）、通学の安全性を考慮する。
- ・境を明確にするため、幹線道路、鉄道、河川、町丁目等で分ける。
- ・原則として自治会・町内会を分断しないようにする。
- ・13地区の地区割について考慮する。
- ・指定校までの通学距離が小学校でおおむね2km、中学校でおおむね3kmの範囲を超える場合には、状況に応じた通学手段を柔軟に検討する。

4 学校適正規模・適正配置を検討すべき対象校の基準

(1) 学校規模について

原則として13地区を基本とし、地区内における学校同士を適正配置の検討対象とします。なお、立地上、地区境にある学校については例外として、学校の状況等を踏まえ、検討します。

具体的には、本市の適正規模の基準である1校あたり12～24学級に近づくよう、通学区域の見直しを含めた検討を行うこととします。これに向けて、まずは、喫緊の課題である31学級以上の過大規模校と11学級以下の小規模校の解消に努めることとし、25学級以上30学級以下の大規模校については、将来的な児童生徒数や学級数の推移を注視していくこととします。

(2) 通学距離について

現在、本市におきましては、徒歩による通学を原則としていることから、国が通学距離の基準として示す、おおむね小学校で4km以内、中学校で6km以内を下回る、小学校で2km以内、中学校で3km以内を目安とした通学距離の設定が実現しており、本方針においても、引き続き、当該基準を維持していくこととします。

(3) 通学区域について

過大規模校・小規模校への対応として、通学区域の見直しを行うことで解消できないか検討するとともに、現在、通学距離を考慮したうえで通学区域の設定が行われているものの、必ずしも学校が区域内の中央に位置するように設定されていないことから、適正化を検討する際には、河川や町丁目等の地形、幹線道路や鉄道等の交通事情、子供たちの生活、地域と学校との関わりを十分に考慮したうえで、通学区域の見直しを行うこととします。

また、隣接する小学校間の距離が1km以内で、どちらかの学校が適正規模を下回ることが予想される場合、小学校間の統合を検討します。なお、中学校については、市内にバランスよく配置されており、また、災害時の避難所等としての役割もあるため、中学校間の統合は原則実施しない方向で検討します。ただし、過小規模校に転じるなど統合が必要となった場合には、近隣にある中学校間の統合を検討します。

(4) 学校施設の老朽化に関すること

学校の統合にあたっては、子どもたちのよりよい教育環境をつくる視点から、統合校の校舎及び屋内運動場の規模、老朽化等の状況により、建て替えや長寿命化改修といった再整備事業の実施についても、同時に検討します。

(5) 支援教育の推進に関すること

白浜養護学校の教室不足の解消と特別支援学級の全校設置に向けて学校の適正配置の検討の中で、白浜養護学校の教室不足や特別支援学級の全校設置に係る課題解消について検討します。

(6) 小中一貫教育の取り組みに関すること

隣接する小、中学校間の距離が概ね1km以内で、統合することで地域課題等が解決されるなど、一定の効果があることが想定される場合、施設一体型を基本とする小中一貫教育化を検討します。

(7) 地域との連携

学校は児童生徒の教育のための施設であるだけでなく、防災、地域の交流の場等、様々な機能を持ち合わせており、地域コミュニティにおいて重要な役割を有しています。

また、本市が取り組んでいる学校・家庭・地域連携推進事業（三者連携ふじさわ）やコミュニティ・スクール（学校運営協議会）では、学校と地域が一体となって地域の子どもたちを育み、「地域とともにある学校づくり」を目指しています。

こうした状況を踏まえ、学校の適正配置にあたっては、地域団体との協議を十分に重ね、地域の意見も取り入れながら進めていきます。

5 学校適正規模・適正配置の取組方法

これまで本市においては、平成23年に学校適正配置検討部会を設置し、児童生徒の推計及び大規模開発等を踏まえ、検討を行ってきました。

今後の検討にあたっては、児童生徒数の推移や学校施設の老朽化対策の課題とともに、新学習指導要領の改訂やICTを活用した学習など、新たな学びにも対応した検討が必要となります。

こうした状況に迅速に対応するため、令和2年度中に教育委員会内で、学校施設の適正規模・適正配置における基本的な考え方をまとめました。

この基本的な考え方をもとに、令和3年度に学識経験者や地域住民、保護者、学校関係者の代表等による検討委員会を立ち上げ、学校適正規模・適正配置に向けた取組として順次「基本方針」と「実施計画」を策定します。

(1) 基本方針の策定と位置付け

「基本方針」は、藤沢市立学校適正規模・適正配置に向けた取組において、本市が適正と考える学校に関する基準を示しました。

「藤沢市立学校適正規模・適正配置に関する基本方針」及び「藤沢市立学校適正規模・適正配置実施計画」については、本市における市政運営の総合指針、公共施設再整備プラン、教育振興基本計画に基づくとともに、学校施設に関連する個別計画と適切に整合を図りながら策定します。

次代を担う藤沢の子どもたちにとって、より良い教育環境をつくり、さらに充実した学校教育が実現できるよう、2040年を見据え、ソフト・ハードの両面から整備するものです。

また、あわせて、施設の老朽化対策及び財政負担の軽減を図るための視点も含め、検討します。

(2) 実施計画の策定と位置付け

基本方針に基づき、2022年度（令和4年度）から2023年度（令和5年度）にかけて適正規模・適正配置の実現に向けて、通学区域の見直しや学校の統合など、具体的な手法や学校名を明記した「藤沢市立学校適正規模・適正配置実施計画（素案）」作成し、パブリックコメントや議会報告などを経て実施計画を策定します。

この実施計画をもとに、適正配置の検討対象となった該当地域では地域ごとに検討を始めます。

実施計画の策定にあたっては、特に以下の3点に配慮して進めます。

- ①子どもたちの教育環境の改善を最善に考えた取組とする。
- ②学校は地域コミュニティの核となっていることを考慮する。
- ③学校関係者、保護者、地域との合意形成を構築する。

【図 x 今後のスケジュール】

計画名	計画期間							
	2020 R2	2021 R3	2022 R4	2023 R5	2024 R6	2025 R7	2026 R8	2027 R9
藤沢市立学校 適正規模・適正配置に 関する基本方針		策定		方針は、国の施策や社会情勢の大きな変化により見直しの必要が生じた際に改訂				
			基本方針に基づく取組					
藤沢市立学校 適正規模・適正配置 実施計画			策定					
			・議会報告 ・パブコメ ・地域説明	実施計画に基づく取組				

(3) 実施計画策定後の各地区における取り組み

実施計画に記載された学校における具体的な検討に当たっては、地域ごとに、学校関係者や保護者、地域住民で構成する「(仮称) 地域別小中学校適正規模・適正配置検討協議会」を設置し、地域における合意形成を図りながら検討を進めます。

地域別協議会で協議された事項は意見書としてまとめ、教育委員会に提出します。提出された意見書の内容については、検討委員会において意見書の内容を検討・調整します。

検討委員会では、意見書の内容を尊重しながら検討を行い、教育委員会に検討結果を報告し、教育委員会は、通学区域の見直しや学校の統合などの方策を検討します。

その検討結果については、教育委員会が地域別協議会に通知します。

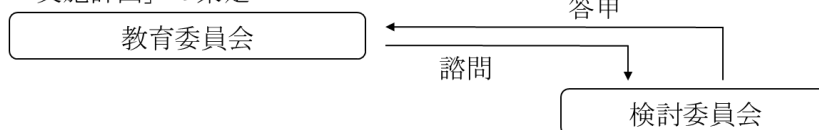
具体的な方策が策定された後は、その方策がより円滑に進むよう、学校関係者、保護者、地域住民と、在校生への配慮事項の協議や、統合に向けての学校間の交流、事前の準備の検討などを行います。

そのために学校関係者、保護者、地域住民で構成する「(仮称) 新校運営課題検討委員会」を設置します。

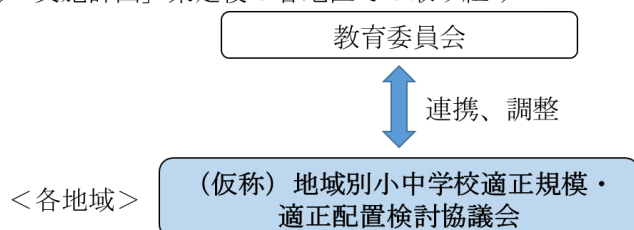
なお、実施計画に記載された学校名については、地域ごとの検討を行った結果、必ず通学区域の見直しや統合などを行うものではありません。

【図 x 今後の進め方】

① 「基本方針」及び「実施計画」の策定

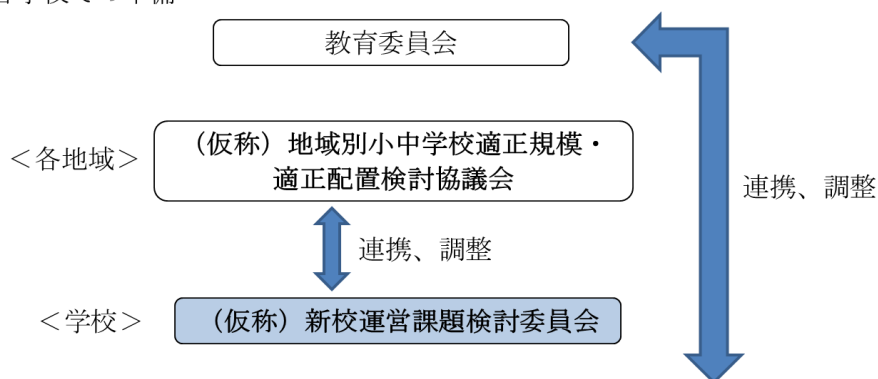


② 「実施計画」策定後の各地区での取り組み



※該当地区に（仮称）地域別小中学校適正規模・適正配置検討協議会を順次設置

③ 各学校での準備



※統合等が円滑に進めるよう各学校に（仮称）新校運営課題検討委員会を設置

（４）基本方針等の見直し

「基本方針」及び「実施計画」については、国の施策の大幅な変更や社会情勢の変化により見直しの必要が生じたときや大幅に児童生徒推計に変化が生じた場合には、再度、検討を行い、見直しを図ります。

参 考 資 料

	頁
1 学校規模に起因する課題（メリット・デメリット）	
（1）学級数が少ないことによる学校運営上の課題	22
（2）教職員が少なくなることによる学校運営上の課題	23
（3）大規模校において考えられる学校運営上の課題	24
（4）学校運営上の課題（前述(1)～(3)が児童生徒に与える影響）	25
2 学校一覧	26
3 学校の老朽化の状況	27
4 学校別児童生徒数の推移	28
5 各地区別資料	30
1 将来人口推計	
2 地区内の学校の状況	
（1）学級数の推移	
（2）学校位置図	
【参考】 1 校舎等の状況	
2 通学距離	
3 道路交通状況	
4 自治会	
5 都市計画	
（片瀬地区，鶴沼地区，辻堂地区，村岡地区，藤沢地区，明治地区，善行地区， 湘南大庭地区，六会地区，湘南台地区，遠藤地区，長後地区，御所見地区）	

1 学校規模に起因する課題（メリット・デメリット）

（1）学級数が少ないことによる学校運営上の課題

<メリット>

- ・児童生徒の一人ひとりに目がとどきやすく、きめ細かな支援・指導が行いやすい。
- ・学校行事や部活動等において、児童生徒の個別の活動機会を設定しやすい。
- ・児童生徒相互の人間関係が深まりやすい。
- ・学校が一体となって活動しやすく、異学年間の交流も生まれやすい。
- ・特別教室、体育館などの利用時間等の調整が行いやすい。
- ・保護者の人数も少ないので連携が図りやすい。
- ・災害発生等による緊急避難時に混雑が生じにくい。
- ・空き教室があれば有効活用できる。
- ・児童生徒指導・支援にあたってレスポンスがよい。
- ・体育館や特別教室が確保しやすい。

<デメリット>

- ・児童生徒間の多様な考えに触れる機会など、切磋琢磨する機会が少なくなりやすい。
- ・単学級の場合、同学年の学級間で相互啓発がなされにくい。
- ・体育的、文化的行事などの集団活動に制約が生じやすい。
- ・クラス替えがしにくく、人間関係が固定化しやすい。
- ・組織的な体制が組みにくく、指導方法等に制約が生じやすい。
- ・子ども一人あたりにかかる経費が大きくなりやすい。
- ・学校全体の活性化が図りにくい。

(2) 教職員が少なくなるによる学校運営上の課題

<メリット>

- ・全教職員間の意思疎通が図りやすく、相互の連携が密になりやすい。
- ・学校が一体となって活動しやすい。
- ・施設・設備の利用時間等の調整が行いやすい。
- ・職員相互に仕事ぶりがよく見える。
- ・職員への周知等が浸透しやすい。

<デメリット>

- ・年齢、教職経験、教科、特性などの面でバランスのとれた教職員配置をしにくい。
- ・学年別や教科別の教職員同士で、相談・研究・協力等が行いにくい。
- ・顧問の人材確保などが難しく、中学校の部活動が限定される。
- ・一人に複数の校務分掌が集中しやすい。
- ・出張、研修等の調整が難しい。
- ・少人数学習や小学校の専科教員による指導など、多様な学習・指導形態をとりにくい。
- ・中学校の授業時数の少ない教科では本務者の配置が難しい。
- ・校務分掌において、何役も兼ねるため教職員一人の負担が大きい。出張も多くなる。
- ・職員が療養休暇等に入ってしまった場合など、職員の補填がきかない。

(3) 大規模校において考えられる学校運営上の課題

<メリット>

- ・ 集団の中で、多様な考え方に触れ、切磋琢磨しやすい。
- ・ 体育的、文化的行事などの集団活動に活気が生じやすい。
- ・ 児童・生徒数、教職員数が多いため、少人数学習や小学校の専科教員による指導など、多様な学習・指導形態をとりやすい。
- ・ 様々な種類の部活動等の設置が可能。
- ・ 学校全体での組織的な指導体制が組みやすい。
- ・ P T A活動等において、役割分担により、保護者の負担を分散しやすい。
- ・ 大規模校では、児童生徒数や学級数に応じた教職員の加配がある。
- ・ 校務分掌を分担して、複数で対応することができる。

<デメリット>

- ・ 全教職員による児童生徒一人ひとりの把握が難しくなりやすい。
- ・ 学校行事等において、一人ひとりの個別の活動機会を設定しにくい。
- ・ 全体に一斉に動く学校行事の運営や緊急避難時等は難しい部分もある(キャパシティの確保、人数制限、時間がかかる等)。
- ・ 学年内・異学年間の交流が不十分になりやすい。
- ・ 教職員相互の連絡調整が図りづらい。
- ・ 特別教室や体育館等の利用調整がしづらい。
- ・ 全体がまとまるまでに時間がかかる。
- ・ 児童生徒が多ければ、それだけ様々な個性、特性を持つ子どもも多く、支援に手間や時間を多く要する。事故やトラブルが起こる割合も高くなる。
- ・ 児童生徒数や教員数が多くなっても、管理職の数は変わらないため、多種多様な対応が必要となり、管理職の負担が大きい。
- ・ 校外行事や校外学習等の場所が限定されることがある。
- ・ 学級数が多いと、運動会や卒業式などの行事において、学年全体での動きがとりづらい。健康診断や避難訓練などにも時間がかかる。
- ・ 登下校時の安全確保が難しい。地域によっては交差点が子どもたちであふれかえり、地域からのクレームにもつながる。
- ・ 体育館に全校の児童生徒が収容できない。
- ・ 小学校など、休み時間の校庭に多くの子どもたちが遊んでおり、けがも多い。
- ・ 学級数が多く教室配置が学年で揃えられないと、1クラスだけ異なるフロアや棟になるとがあり、学年のまとまりがとりづらい。

(4) 学校運営上の課題(前述(1)から(3)が児童生徒に与える影響)

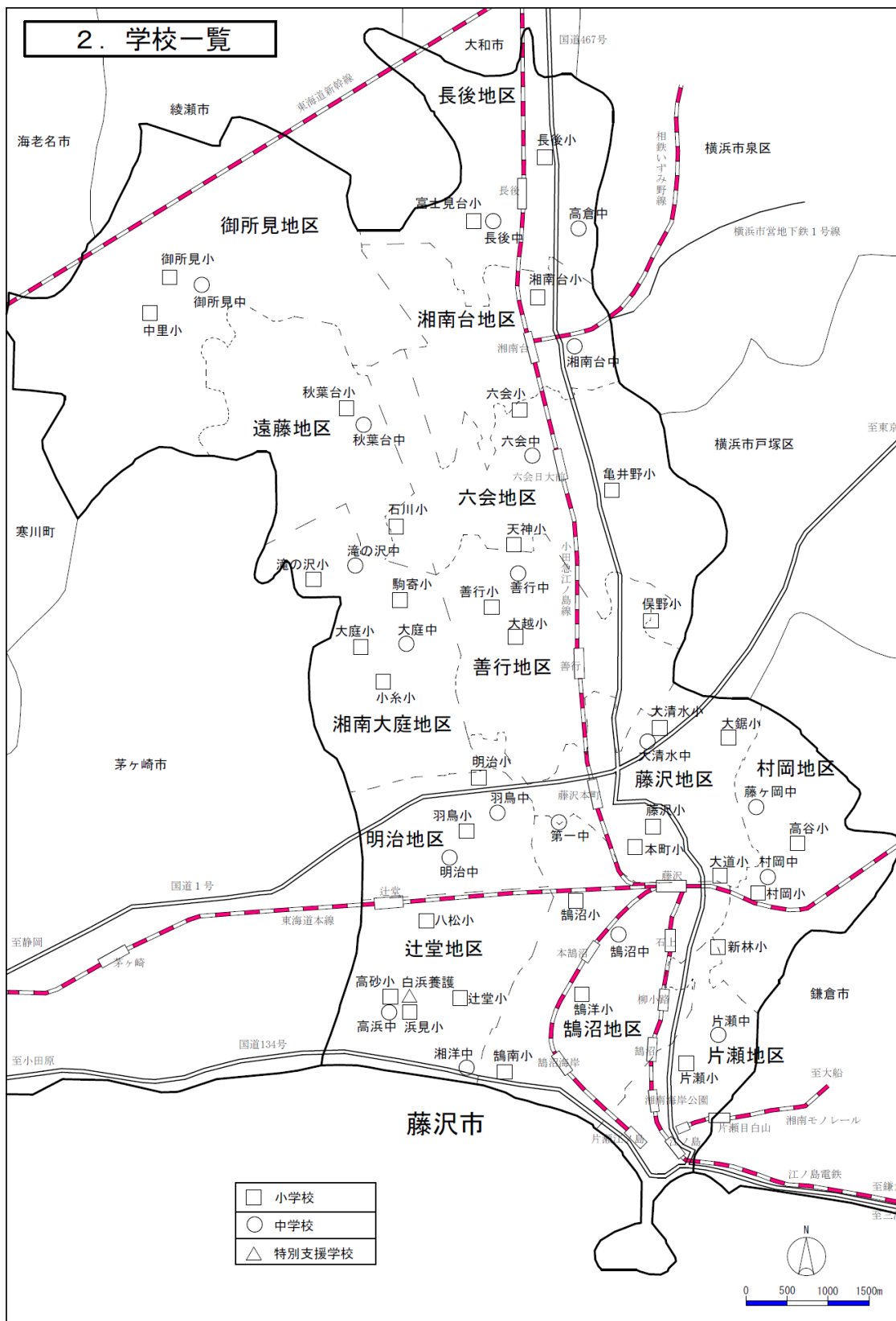
<小規模校>

- きめ細かな指導が可能→心身の健やかな成長, 資質や能力の伸長。
- 個別の活動の機会→活動の満足度が高く, 自己肯定感も高まる。
- 安心感をもって落ち着いた学校生活が送れる。
- 個々の児童生徒の状況を把握しやすく, 個に応じた指導やきめ細かな支援を行いやすい。
- 切磋琢磨する機会が少ない。
- 人間関係の固定化→マイナス面の改善が困難。
- クラス替えなども難しく, 児童生徒の人間関係が固定化しやすい。

<大規模校>

- 集団での切磋琢磨→社会性やたくましさ等を育みやすい。
- クラス替え→豊かな人間関係の構築, 多様な集団の形成が可能。
- 様々な人との出会い→多様な考え方に出会い成長できる。
- 多くの教職員が関わることで, 多面的に子どもを見ることができる。
- 多様な人間関係を構築する機会が多い。
- 大きな集団の中で, 子ども同士が切磋琢磨し合える。
- 教職員数, 児童生徒数が多いため, 多様な学習・指導形態が可能となる。
- 個別の活動の機会が少ない, 個の発表の機会が少ない→自己肯定感, 自己有用感を育む機会が少ない。
- 全校単位, 学年単位での活動に制約がかかる→活動機会が狭まる。
- 子ども同士の事故やトラブルが多くなる。

2 学校一覧



3 学校の老朽化の状況

学校名	校舎建設年	建築後	屋内運動場	建築後
藤沢小	1969	51年	1991	29年
明治小	1968	52年	1988	32年
鶴沼小	1968	52年	1966	54年
本町小	2012	8年	1973	47年
村岡小	1970	50年	1968	52年
六会小	1999	21年	1999	21年
辻堂小	1968	52年	1965	55年
鶴洋小	1960	60年	1965	55年
片瀬小	1964	56年	1969	51年
大道小	1968	52年	1966	54年
秋葉台小	1965	55年	1970	50年
御所見小	1972	48年	1969	51年
長後小	1967	53年	1968	52年
八松小	1985	35年	1967	53年
高砂小	1995	25年	1995	25年
善行小	2009	11年	2009	11年
富士見台小	1967	53年	1971	49年
鶴南小	1970	50年	1972	48年
浜見小	1970	50年	1973	47年
俣野小	1971	49年	1974	46年
大越小	1971	49年	1974	46年
羽鳥小	1972	48年	1974	46年
湘南台小	1972	48年	1975	45年
大庭小	1976	44年	1976	44年
亀井野小	1977	43年	1977	43年
新林小	1978	42年	1978	42年
中里小	1978	42年	1978	42年
滝の沢小	1979	41年	1979	41年
大鋸小	1980	40年	1980	40年
天神小	1981	39年	1981	39年
駒寄小	1981	39年	1981	39年
高谷小	1982	38年	1982	38年
小糸小	1982	38年	1982	38年
大清水小	1983	37年	1983	37年
石川小	1994	26年	1994	26年

令和2年4月1日現在

学校名	校舎建設年	建築後	屋内運動場	建築後
第一中	2009	11年	2009	11年
明治中	1970	50年	1998	22年
鶴沼中	1970	50年	1993	27年
六会中	2009	11年	2020	0年
片瀬中	2003	17年	2003	17年
御所見中	1971	49年	1966	54年
湘洋中	1989	31年	1989	31年
長後中	1993	27年	1993	27年
藤ヶ岡中	2000	20年	2000	20年
高浜中	1973	47年	1973	47年
善行中	1976	44年	1976	44年
秋葉台中	1976	44年	1976	44年
大庭中	1979	41年	1979	41年
村岡中	1980	40年	1980	40年
湘南台中	1981	39年	1981	39年
高倉中	1982	38年	1982	38年
滝の沢中	1982	38年	1982	38年
大清水中	1984	36年	1984	36年
羽鳥中	1986	34年	1986	34年
白浜養護	1997	23年	1997	23年

4 学校別児童生徒数の推移

<小学校>

(人)

学校名	R2	R7	R12	R17	R22
	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
藤沢小学校	588	557	513	494	511
明治小学校	871	925	880	863	855
鵜沼小学校	867	963	863	800	787
本町小学校	804	709	633	610	630
村岡小学校	538	552	495	495	526
六会小学校	993	954	888	873	904
辻堂小学校	1,225	1,236	1,098	1,089	1,114
鵜洋小学校	1,184	1,086	954	886	871
片瀬小学校	764	631	513	469	464
大道小学校	647	718	674	650	671
秋葉台小学校	666	561	618	730	699
御所見小学校	471	344	291	267	260
長後小学校	887	802	757	727	736
八松小学校	711	738	712	708	724
高砂小学校	537	659	623	619	633
善行小学校	447	437	402	374	367
富士見台小学校	679	620	553	532	539
鵜南小学校	551	514	454	422	416
浜見小学校	407	283	256	256	264
俣野小学校	310	306	294	273	269
大越小学校	644	549	454	421	414
羽鳥小学校	984	854	716	689	711
湘南台小学校	792	792	742	721	710
大庭小学校	489	416	351	318	302
亀井野小学校	656	654	597	588	609
新林小学校	579	767	715	712	755
中里小学校	326	234	205	188	184
滝の沢小学校	613	465	349	316	300
大鋸小学校	774	744	626	603	623
天神小学校	536	434	415	410	427
駒寄小学校	521	426	337	305	291
高谷小学校	906	789	674	671	712
小糸小学校	291	258	211	193	184
大清水小学校	336	310	290	282	293
石川小学校	640	655	571	562	583
合計	23,234	21,942	19,724	19,116	19,338

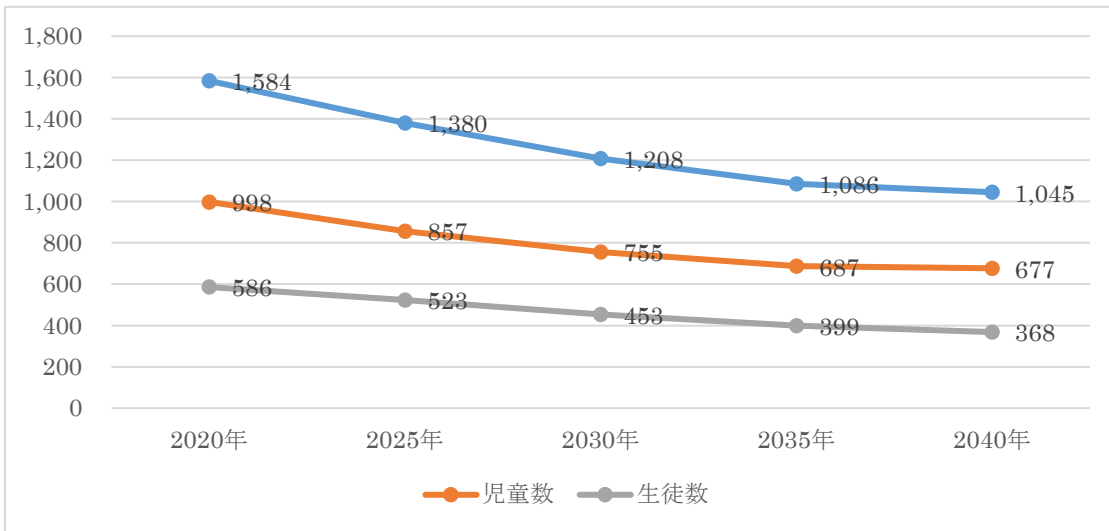
<中学校>

(人)

学校名	R2	R7	R12	R17	R22
	2020年	2025年	2030年	2035年	2040年
第一中学校	707	735	646	583	575
明治中学校	619	743	810	769	752
鵜沼中学校	806	913	894	746	701
六会中学校	764	752	666	576	574
片瀬中学校	478	366	305	243	226
御所見中学校	410	383	282	198	184
湘洋中学校	791	833	769	639	635
長後中学校	355	385	345	282	276
藤ヶ岡中学校	697	816	733	643	658
高浜中学校	421	436	415	380	379
善行中学校	378	370	395	338	317
秋葉台中学校	429	333	303	317	373
大庭中学校	554	513	422	320	295
村岡中学校	620	748	795	771	785
湘南台中学校	574	572	610	596	576
高倉中学校	434	379	361	327	320
滝の沢中学校	707	653	547	462	425
大清水中学校	290	325	303	259	257
羽鳥中学校	524	478	349	290	285
合計	10,558	10,733	9,950	8,739	8,593

片瀬地区

1. 将来人口推計（児童・生徒・合計）

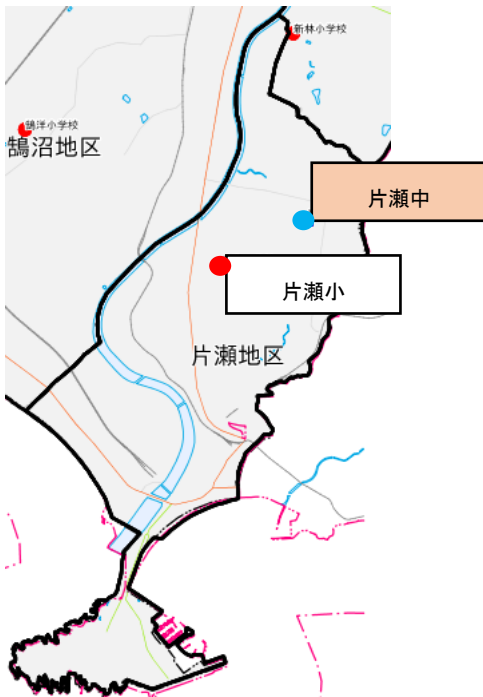


2. 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2020年	2030年	2040年	状態	備考
片瀬小	27	23	18	18		
片瀬中	18	13	9	6	小規模	

(2) 学校位置図



【参考】

1. 校舎等の状況

小学校名	校地面積	校舎面積	屋内運動場	校舎築後	備考
	(㎡)	(㎡)	面積 (㎡)	(年)	
片瀬小学校	12,241	5,180	626	56	仮設校舎1棟(3教室)
片瀬中学校	22,407	7,452	2,356	17	

2. 通学距離

<小学校>

- ・本地区には片瀬小学校が設置されており、片瀬小学校の通学区域は東西に約2.2km、南北に約3kmとなっている。通学距離においては約2.5kmが最長距離となっている。

<中学校>

- ・本地区には、片瀬中学校が設置されており、片瀬中学校の通学区域は東西に約2.0km、南北に約3.0kmとなっている。

3. 道路、交通状況、土地利用状況

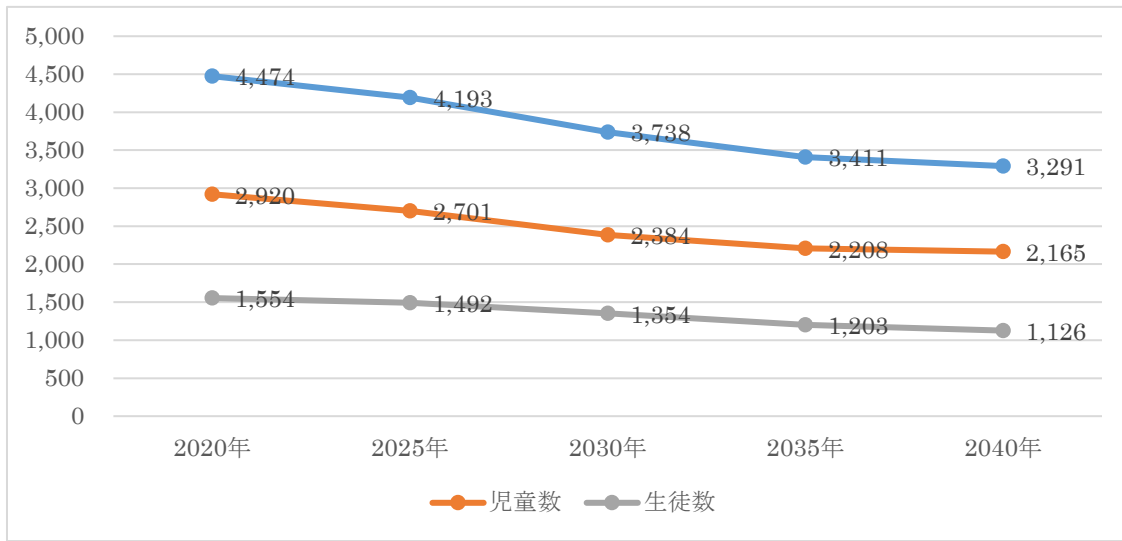
- ・道路、交通状況を見ると、都市計画道路の横浜藤沢線が未整備となっており、居住地域では狭隘道路も多くなっている。また、津波・高潮や浸水等の災害危険度が高い地区となっている。
- ・片瀬山周辺と沿岸部では高低差があり、それぞれに低層住宅地が広がっている。沿岸部の国道134号や国道467号沿いでは中高層住宅の立地がみられる。
- ・今後の土地利用状況においては、片瀬江ノ島駅周辺等の高層マンション計画も少しずつ進んでいることから、状況把握が必要である。

4. 自治会

- ・自治会との関係では、新屋敷第一町内会において、新林小学校と片瀬小学校に通学区域が分かれている区域がある。

鶴沼地区

1. 将来人口推計（児童・生徒・合計）

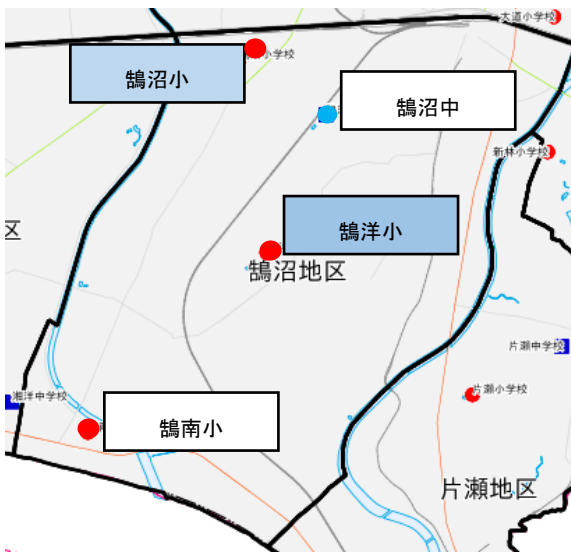


2. 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2020年	2030年	2040年	状態	備考
鶴沼小	31	26	30	24		
鶴洋小	36	34	30	30	大規模	
鶴南小	18	17	18	12		
鶴沼中	28	22	24	18		

(2) 学校位置図



【参考】

1. 校舎等の状況

小学校名	校地面積	校舎面積	屋内運動場	校舎築後	備考
	(㎡)	(㎡)	面積 (㎡)	(年)	
鵜沼小学校	12,212	5,701	621	52	
鵜洋小学校	17,420	5,821	632	60	仮設校舎3棟(8教室)
鵜南小学校	10,908	4,557	633	50	改築工事中(～R6)
鵜沼中学校	21,327	6,504	1,419	50	H5 屋内運動場改築 仮設校舎1棟(4教室)

2. 通学距離

<小学校>

- ・本地区には鵜沼小学校・鵜洋小学校・鵜南小学校と3つの学校が設置されており、鵜沼小学校の通学区域は東西に約2km、南北に2.2km、鵜洋小学校は東西に2.2km、南北に2.2km、鵜南小学校は東西に1.2km、南北に2.1kmとなっている。

<中学校>

- ・本地区には、鵜沼中学校が設置されており、鵜沼中学校の通学区域は東西に約2.3km、南北に約2.1kmとなっている。

3. 道路、交通状況、土地利用状況

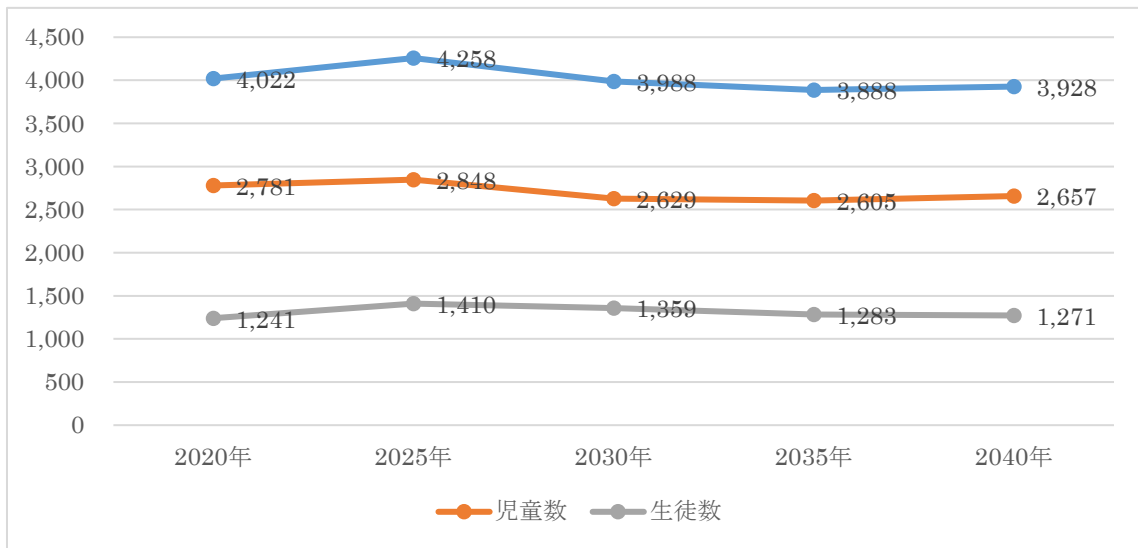
- ・道路、交通状況においては、鵜沼小学校の学区において、通学路の中でJRの踏切を渡り通学しなければならない箇所がある。
- ・狭隘道路や行き止まり道路も多く生活道路が不十分であるとともに、近年の宅地細分化により更に地震災害等への危険度が高まっている。さらに、津波・高潮や浸水等の災害危険度が高い地区となっている。
- ・全体的に低層住宅地が形成されている。藤沢駅周辺や国道134号線沿道には中高層住宅の立地がみられる。また、藤沢駅周辺は都市拠点であり、高層マンションなども可能な地域となっている。
- ・今後の土地利用状況においては、藤沢駅の南側商業地域を中心とした大型・高層マンション計画が進んでいるため、状況把握が必要である。

4. 自治会

- ・自治会との関係では、花沢町1丁目町内会において、大道小学校と鵜沼小学校、原町内会・ひさご会・新樹会において鵜沼小学校と鵜洋小学校に通学区域が分かれている区域がある。

辻堂地区

1. 将来人口推計（児童・生徒・合計）

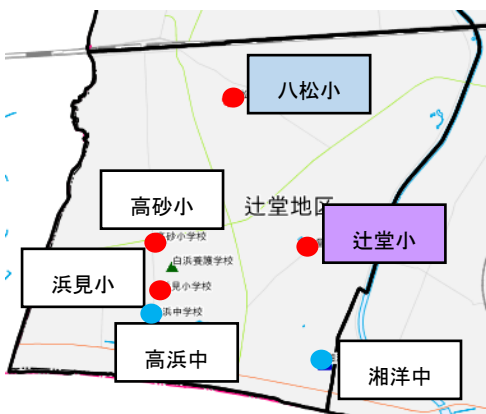


2. 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2020年	2030年	2040年	状態	備考
辻堂小	36	34	36	36	過大規模	
八松小	23	22	24	24		
高砂小	18	17	18	24		
浜見小	16	12	12	12		
湘洋中	28	21	20	18		
高浜中	16	12	12	12		-

(2) 学校位置図



【参考】

1. 校舎等の状況

小学校名	校地面積	校舎面積	屋内運動場	校舎築後	備考
	(㎡)	(㎡)	面積 (㎡)	(年)	
辻堂小学校	19,882	6,030	645	52	仮設校舎2棟(9教室)
八松小学校	14,001	4,813	633	52	仮設校舎1棟(2教室)
高砂小学校	16,173	5,769	963	25	
浜見小学校	14,609	4,405	645	50	
湘洋中学校	24,366	7,293	1,219	31	H28増築(5教室)
高浜中学校	14,943	4,878	785	47	

2. 通学距離

<小学校>

- ・本地区には辻堂小学校・八松小学校・高砂小学校・浜見小学校と4つの学校が設置されており、辻堂小学校の通学区域は東西に約1.6km、南北に約2.2km、八松小学校の通学区域は東西に約2.4km、南北に約1.5km、高砂小学校は東西に約1.4km、南北に約1.1km、浜見小学校は東西に約1.5km、南北に約1kmとなっている。

<中学校>

- ・本地区には、湘洋中学校と高浜中学校が設置されており、湘洋中学校の通学区域は東西に約2.6km、南北に約3.0km、高浜中学校は東西に1.4km、南北に1.5kmとなっている。

3. 道路、交通、土地利用状況

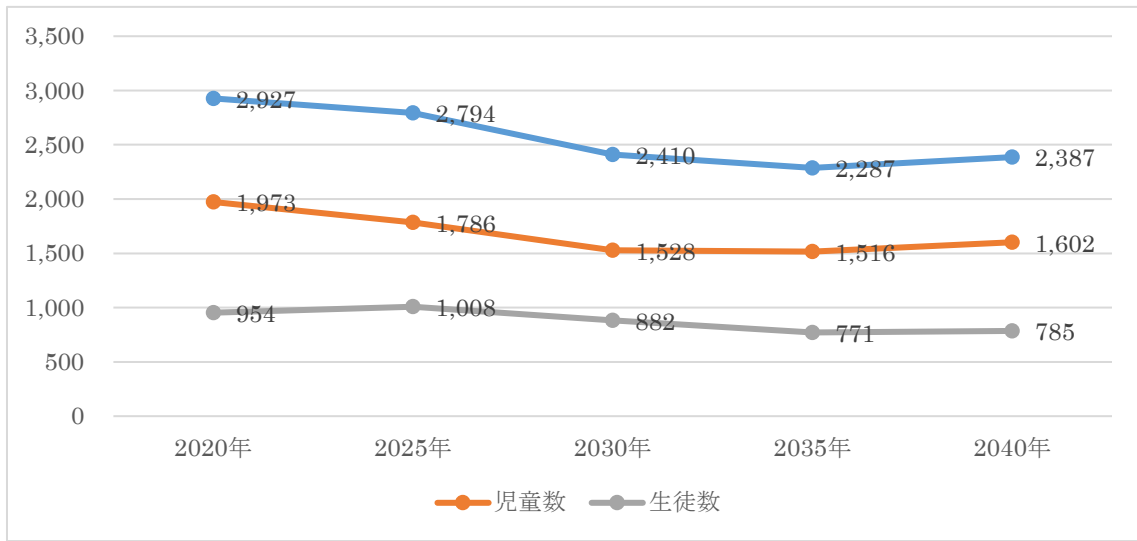
- ・辻堂地区では、未整備の都市計画道路が多く、特に東西方向などのネットワークが不十分となっている。また、地域では、狭隘道路も多く、津波・高潮や浸水等の災害危険度が高い地区となっている。
- ・全体的に低層住宅地が形成されている。地区の南西部の湘南海岸公園周辺には比較的建築年数が古い辻堂団地のほか、比較的新しい中層住宅を含む共同住宅群が形成されている。また、辻堂駅周辺は都市拠点であり、高層マンションなども可能な地域となっているため、状況把握が必要である。

4. 自治会

- ・自治会との関係では、辻堂新町町内会において、八松小学校と明治小学校、打越会において羽鳥小学校と八松小学校、桜花園自治会において八松小学校と高砂小学校、辻堂北町町内会と辻堂西町町内会において八松小学校と辻堂小学校、辻堂南海岸町内会において高砂小学校と浜見小学校、辻堂団地自治会において高砂小学校と浜見小学校に通学区域が分かれている区域がある。

村岡地区

1. 将来人口推計（児童・生徒・合計）

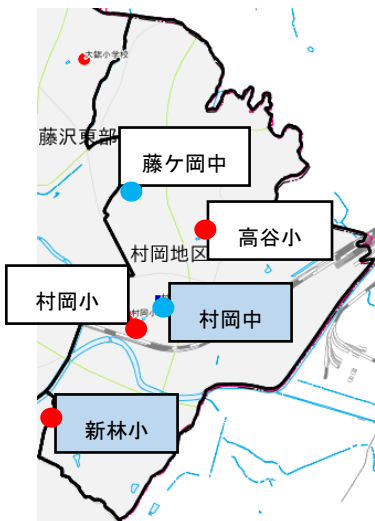


2. 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2020年	2030年	2040年	状態	備考
村岡小	20	17	18	18		
新林小	25	18	24	24		
高谷小	28	26	24	24		
藤ヶ岡中	20	19	19	18		
村岡中	20	17	21	21		

(2) 学校位置図



【参考】

1. 校舎等の状況

小学校名	校地面積	校舎面積	屋内運動場	校舎築後	備考
	(㎡)	(㎡)	面積 (㎡)	(年)	
村岡小学校	11,137	4,832	631	50	
新林小学校	12,435	4,826	648	42	
高谷小学校	14,868	4,747	678	38	仮設校舎1棟(4教室)
藤ヶ岡中学校	30,164	8,164	2,129	20	
村岡中学校	17,719	6,688	804	40	

2. 通学距離

<小学校>

- ・本地区には、村岡小学校・新林小学校・高谷小学校と3つの学校が設置されており、村岡小学校の通学区域は東西に約2.1km、南北に約2.1km、新林小学校は東西に1.8km、南北に約1.8km、高谷小学校は東西に約2.0km、南北は約1.4kmとなっている。

<中学校>

- ・本地区には、藤が岡中学校と村岡中学校が設置されており、藤が岡中学校の通学区域は東西に約2.3km、南北に約1.8km、村岡中学校は東西に約2.8km、南北に約2.3kmとなっている。

3. 道路、交通、土地利用状況

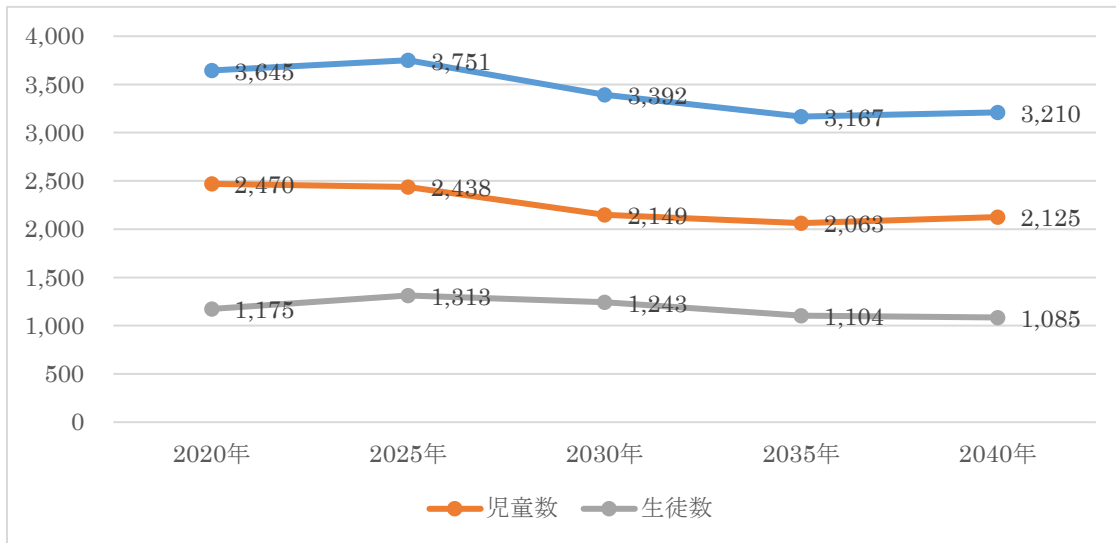
- ・地区の骨格となる道路網は、「かながわのみちづくり計画」において交流幹線道路として位置づけられている横浜藤沢線が地区南側で未整備となっていますが、それ以外は概ね整備を終えている。
- ・地区の中央にはJR東海道線が横断しており、南北に通行できる箇所が限られている。
- ・鉄道沿線や地区の南部には工業地と住宅地が分布しており、住宅地には中高層住宅と低層住宅が混在している。地区の北部は、土地区画整理事業により低層住宅地が広く形成されている。
- ・今後の土地利用状況においては、新たな村岡新駅を中心としたまちづくりが進むため、中高層が許容されている地域における土地利用の転換や人口増等の動向を注視する必要がある。

4. 自治会

- ・自治会との関係では、新屋敷第一町内会において、新林小学校と片瀬小学校に通学区域が分かれている区域がある。
- ・自治会との関係では、新西富自治会において、大清水中学校と藤ヶ岡中学校、舟久保町内会・天嶽院下自治会・渡内西町内会・渡内町内会・御幣山自治会において、村岡中学校と藤ヶ岡中学校、喜楽町町内会においては、村岡中学校と第一中学校に通学区域が分かれている区域がある。

藤沢地区

1. 将来人口推計（児童・生徒・合計）

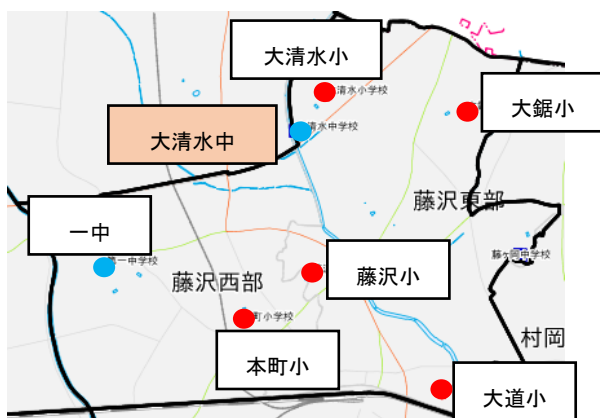


2. 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2020年	2030年	2040年	状態	備考
藤沢小	20	19	18	18		
本町小	24	24	24	18		
大道小	23	20	24	24		
大鋸小	23	23	18	18		
大清水小	14	12	12	12		
第一中	21	19	18	15		
大清水中	17	9	9	9	小規模	

(2) 学校位置図



【参考】

1. 校舎等の状況

小学校名	校地面積	校舎面積	屋内運動場	校舎築後	備考
	(㎡)	(㎡)	面積 (㎡)	(年)	
藤沢小学校	20,087	4,467	1,255	51	H3 屋内運動場改築
本町小学校	17,002	6,884	636	8	屋体築 47 年
大道小学校	16,549	5,608	632	52	H5 増築(管理諸室棟)
大鋸小学校	15,039	4,278	652	40	仮設校舎 1 棟(2 教室)
大清水小学校	14,000	3,891	652	37	
第一中学校	26,709	7,818	1,271	11	
大清水中学校	19,323	5,268	804	36	

2. 通学距離

<小学校>

- ・本地区には、藤沢小学校・本町小学校・大道小学校・大鋸小学校と 5 つの学校が設置されており、藤沢小学校の通学区域は東西に約 1.5 km、南北に約 1.7 km、本町小学校は東西に約 1.7 km、南北に約 2.2 km、大道小学校は東西に約 1.3 km、南北は約 1.3 km、大鋸小学校は東西に約 1.7 km、南北は約 1.1 km、大清水小学校は東西に約 1.7 km、南北に約 1.0 km となっている。

<中学校>

- ・本地区には、第一中学校と大清水中学校が設置されており、第一中学校の通学区域は東西に約 1.8 km、南北に約 2.7 km、大清水中学校は東西に約 1.7 km、南北に約 3.3 km となっている。

3. 道路、交通、土地利用状況

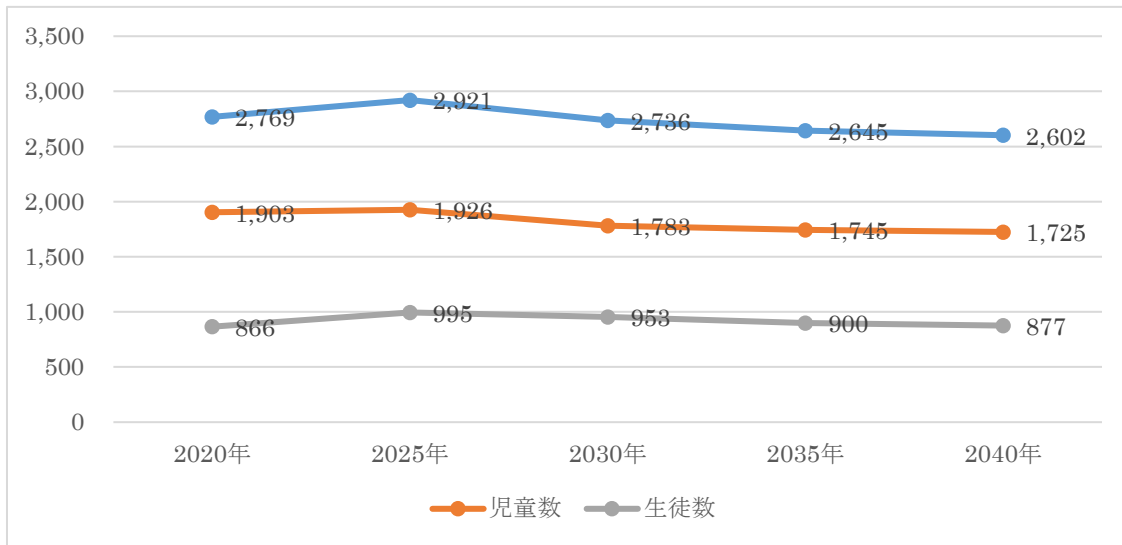
- ・本地区は 13 地区内の中で最も小学校が設置されている地区で各学校間の距離が接近している。藤沢駅周辺の国道 467 号などでは、交通渋滞が発生しており、通学の時間帯に交通量が多くなっており、一部では狭隘道路も多くなっている。
- ・地区内には線路や河川があり、横断できる箇所が限られている。
- ・藤沢駅周辺は都市拠点として高層マンションなども立地が可能な区域となっており、中心市街地では立地がみられる。一方で中心市街から少し離れた縁辺部では古い戸建て住宅の混在もみられる。
- ・地区の東側は、土地区画整理事業等により低層住宅地が広く形成されているほか、一部では大規模な高層住宅が再整備されている。
- ・今後の土地利用状況においては、藤沢駅の北側商業地域を中心とした高層マンション計画も少しずつ進んでいる。また、本地区西側の端に位置する日本電気硝子工場跡地の土地利用が進むため、注視する必要がある。

4. 自治会

- ・柄沢町内会において、大鋸小学校と高谷小学校と村岡小学校，南仲通四丁目町内会において藤沢小学校と本町小学校，船久保町内会に藤沢小学校と大道小学校，相生町町内会に藤沢小学校と本町小学校，喜楽町町内会に藤沢小学校と大道小学校，花沢町1丁目町内会に大道小学校と鵜沼小学校，日の出町自治会に大道小学校と新林小学校に通学区域が分かれている区域がある。
- ・新西富自治会において、大清水中学校と藤ヶ岡中学校，喜楽町町内会において、第一中学校と村岡中学校に，西俣野中自治会において、六会中学校と大清水中学校に分かれる。

明治地区

1. 将来人口推計（児童・生徒・合計）

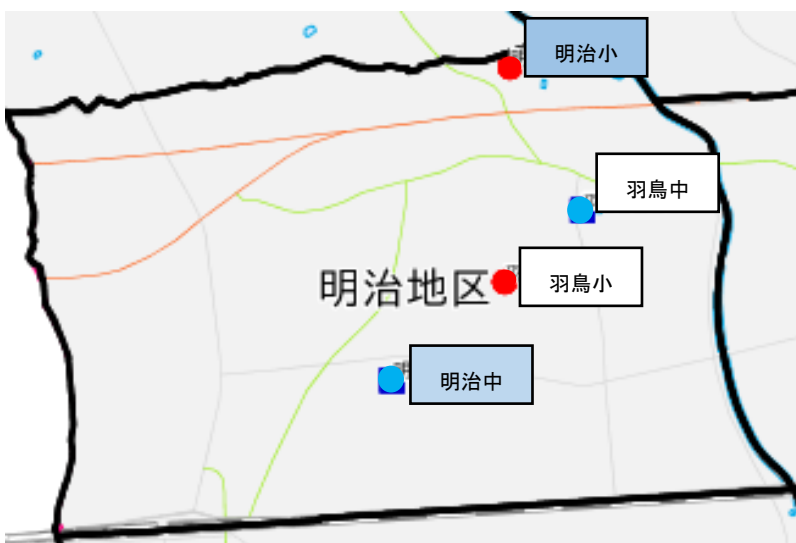


2. 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2020年	2030年	2040年	状態	備考
明治小	31	25	30	30	大規模	
羽鳥小	30	30	24	24		大規模→適正
明治中	20	18	22	21		
羽鳥中	18	14	10	9	小規模	

(2) 学校位置図



【参考】

1. 校舎等の状況

小学校名	校地面積	校舎面積	屋内運動場	校舎築後	備考
	(㎡)	(㎡)	面積 (㎡)	(年)	
明治小学校	20,881	6,015	1,038	52	S63 屋内運動場改築 仮設校舎 1 棟(4 教室)
羽鳥小学校	13,350	4,566	628	48	仮設校舎 1 棟(6 教室)
明治中学校	16,541	5,368	1,744	50	H11 屋内運動場改築
羽鳥中学校	16,387	5,580	1,282	34	仮設校舎 1 棟(4 教室)

2. 通学距離

<小学校>

- ・本地区には、明治小学校・羽鳥小学校と2つの学校が設置されており、明治小学校の通学区域は東西に約2.5km、南北に約2.3km、羽鳥小学校は東西に約1.4km、南北に約0.8kmとなっている。

<中学校>

- ・本地区には、明治中学校と羽鳥中学校が設置されており、明治中学校の通学区域は東西に約2.4km、南北に約3.5km、羽鳥中学校は東西に約2.1km、南北に約2.3kmとなっている。

3. 道路、交通、土地利用状況

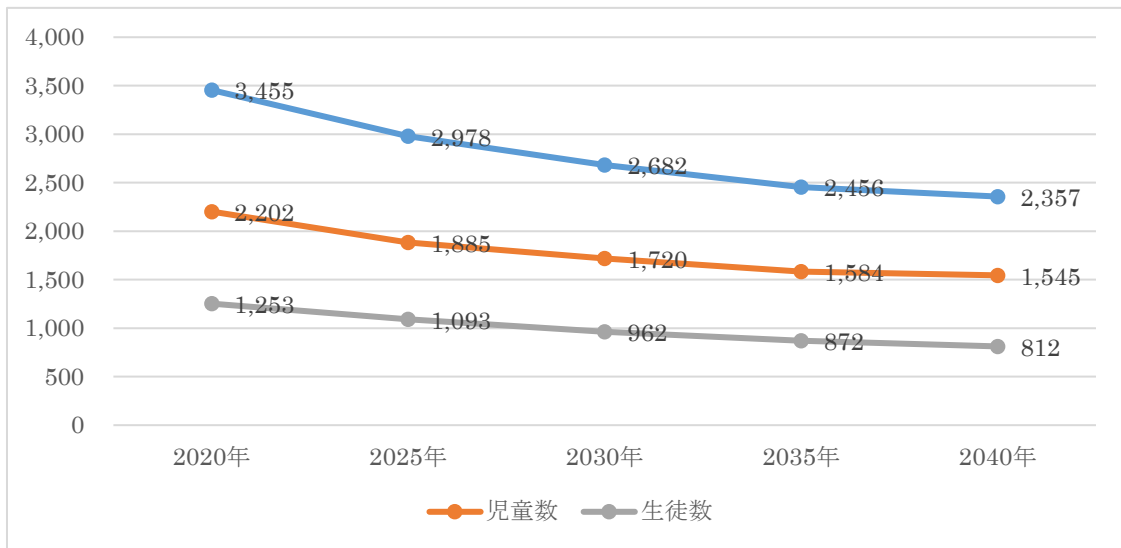
- ・都市計画道路の整備状況を見ると、明治地区は、藤沢市内でも整備が完了している都市計画道路が多い地区であるが、横浜湘南道路、県道43号（藤沢厚木）などが未整備となっている。
- ・辻堂駅北口の大規模工場跡地の再整備に伴い、駅周辺には大規模な高層住宅が立地している。また、駅周辺の再整備により地区の魅力が高まったことで、周辺における大型マンションの立地もみられる。
- ・東海道線沿線では、工業系から商業施設や中高層住宅への土地利用転換が進んでいる。
- ・その他の地域でも低層・中高層の住宅がともに広く分布している。

4. 自治会

- ・自治会との関係では、辻堂新町町内会において、明治小学校と八松小学校と羽鳥小学校、打越会では羽鳥小学校と八松小学校に通学区域が分かれている区域がある。
- ・自治会との関係では、羽鳥向町内会・共和自治会において、羽鳥中学校と明治中学校に通学区域が分かれている区域がある。

善行地区

1. 将来人口推計（児童・生徒・合計）

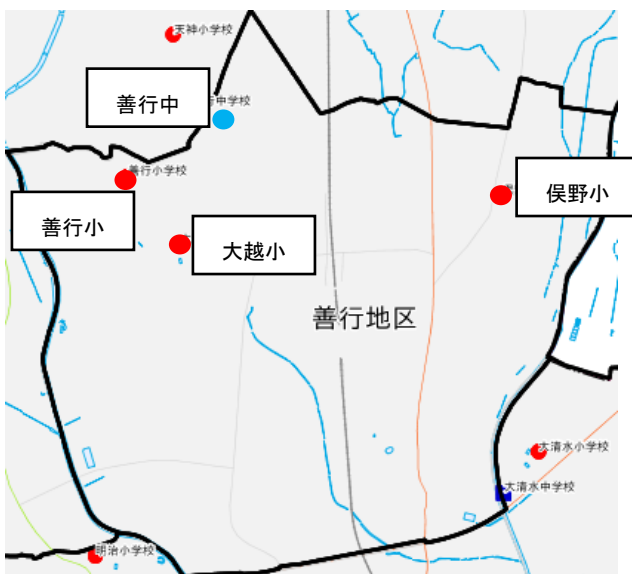


2. 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2020年	2030年	2040年	状態	備考
善行小	17	15	12	12		
俣野小	18	12	12	12		
大越小	22	19	18	12		
善行中	22	12	12	9	小規模	

(2) 学校位置図



【参考】

1. 校舎等の状況

小学校名	校地面積	校舎面積	屋内運動場	校舎築後	備考
	(㎡)	(㎡)	面積 (㎡)	(年)	
善行小学校	15,321	6,175	1,040	11	
俣野小学校	16,312	5,115	633	49	
大越小学校	15,548	4,943	792	49	
善行中学校	16,529	6,184	653	44	

2. 通学距離

<小学校>

- ・本地区には、善行小学校・大越小学校と2つの学校が設置されており、善行小学校の通学区域は東西に約1.7km、南北に約2.6km、大越小学校は東西に約1.0km、南北は約1.7kmとなっている。

<中学校>

- ・本地区には、善行中学校が設置されており、通学区域は東西に約2.0km、南北に約2.0kmとなっている。

3. 道路、交通、土地利用状況

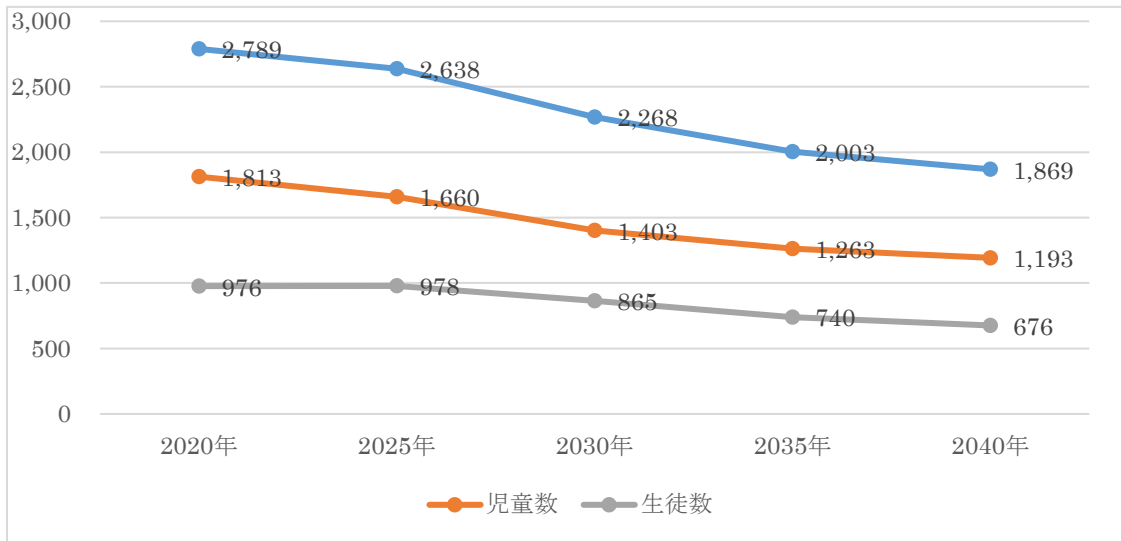
- ・都市計画道路の整備状況を見ると、都市計画道路の整備は、藤沢石川線の一部区間を残して、概ね完了している。また、地域東側、西側の一部の地域には、狭隘道路なども多くなっている。
- ・地区の東西には境川と引地川が流れており、その周辺は市街化調整区域となっている。
- ・地区を縦断するように小田急江ノ島線が位置しているとともに、地区の中央から南部にかけて県立体育センターや大規模な教育施設等が立地していることから、通行できる箇所が限られている。
- ・地区の北西部の大規模な善行団地や国道467号線東側の県営住宅など、昭和40年代の土地区画整理事業や民間宅地開発より団地が整備されており、多くの住宅で更新時期を迎えつつある。

4. 自治会

- ・自治会との関係では、善行団地自治会・庭東町町内会・善行町内会において、善行小学校と大越小学校に通学区域が分かれている区域がある。
- ・自治会との関係では、新田自治会において、六会中学校と善行中学校に通学区域が分かれている区域がある。

湘南大庭地区

1. 将来人口推計（児童・生徒・合計）

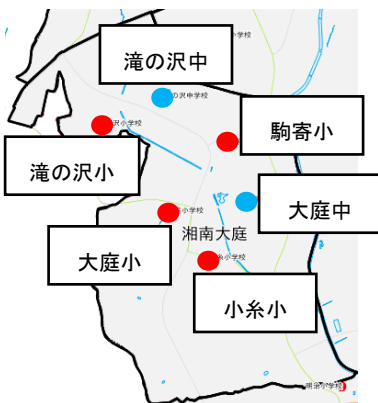


2. 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2020年	2030年	2040年	状態	備考
大庭小	25	16	12	12		
滝の沢小	28	19	12	12		
駒寄小	20	18	12	12		
小糸小	23	12	12	6	小規模	
大庭中	22	14	12	9	小規模	
滝の沢中	27	18	15	12		

(2) 学校位置図



【参考】

1. 校舎等の状況

小学校名	校地面積	校舎面積	屋内運動場	校舎築後	備考
	(㎡)	(㎡)	面積 (㎡)	(年)	
大庭小学校	17,410	6,363	628	44	
滝の沢小学校	16,666	6,373	669	41	
駒寄小学校	15,867	4,789	652	39	
小糸小学校	17,427	5,353	650	38	
大庭中学校	21,488	6,818	671	41	
滝の沢中学校	23,586	7,142	799	38	

2. 通学距離

<小学校>

- ・本地区には、大庭小学校・滝の沢小学校・駒寄小学校・小糸小学校と4つの学校が設置されており、大庭小学校の通学区域は東西に約0.9km、南北に約1.4km、滝の沢小学校は東西に約1.4km、南北に約1.1km、駒寄小学校は東西に約1.0km、南北は約1.5km、小糸小学校は東西に約1.3km、南北は約1.4kmとなっている。

<中学校>

- ・本地区には、大庭中学校と滝の沢中学校が設置されており、大庭中学校の通学区域は東西に約1.8km、南北に約1.8km、滝の沢中学校は東西に約2.3km、南北に約1.7kmとなっている。

3. 道路、交通、土地利用状況

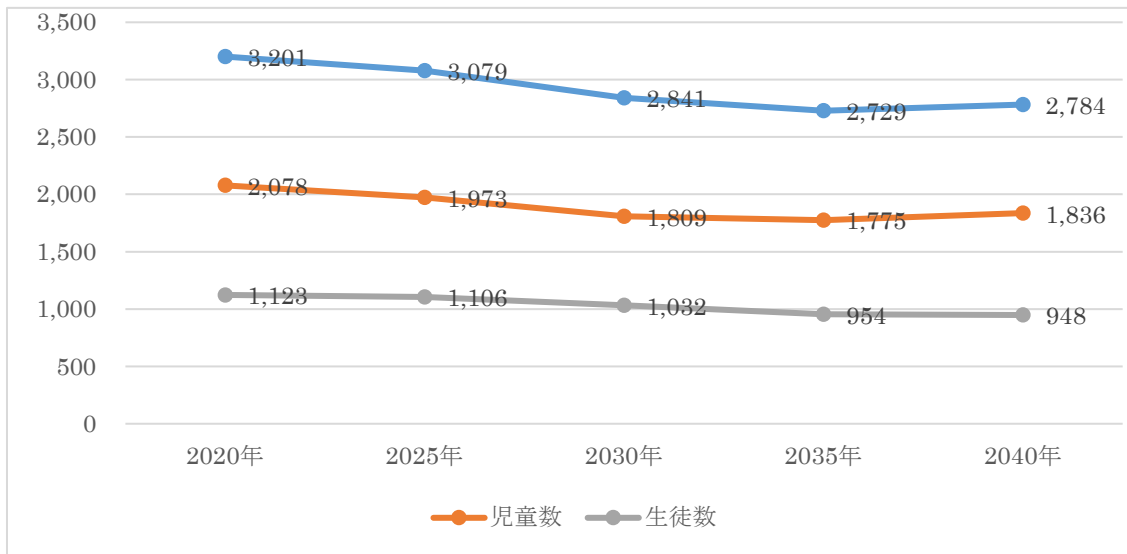
- ・急激な人口増加に伴う無秩序な市街化を防ぐため、すぐれた緑地資源と変化に富む自然条件を生かした緑豊かな住宅地の開発を、また農業環境の保全・整備を目的として「都市と農業の調和するまち湘南ライフタウン」の総合的まちづくりを行っている。都市計画道路の整備状況を見ると、土地区画整理事業などによる総合的まちづくりにより都市基盤整備が行われたことから、整備が完了している。
- ・昭和50年～60年代に住み始めた世帯が多く、高齢化率が最も高い。
- ・湘南ライフタウンにおいては、今後さらに、地区の高齢化や住宅の老朽化が進み、大規模住宅団地の再活性化が課題となっている。

4. 自治会

- ・自治会との関係では、遠藤南部自治会において、滝の沢中学校と秋葉台中学校、石川山田自治会において、滝の沢中学校と六会中学校に通学区域が分かれている区域がある。

六会地区

1. 将来人口推計（児童・生徒・合計）

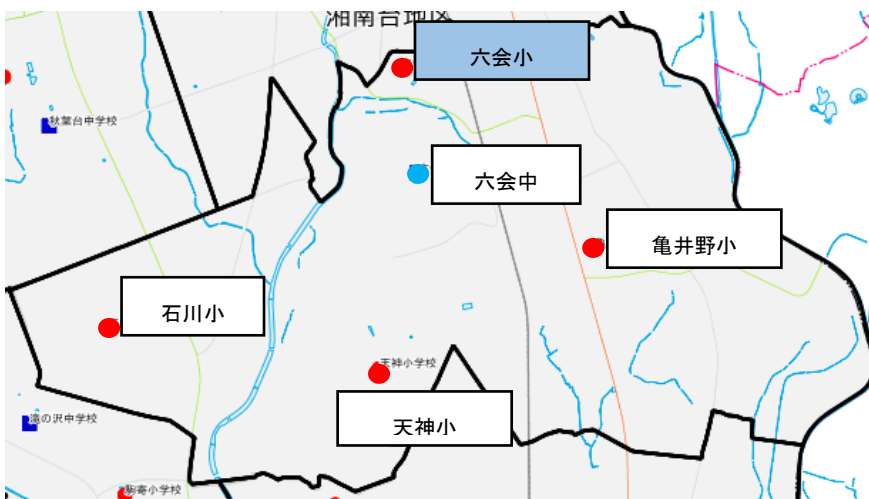


2. 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2020年	2030年	2040年	状態	備考
六会小	36	28	30	30	大規模	
亀井野小	27	19	18	18		
天神小	20	18	12	18		
石川小	22	20	18	18		
六会中	24	20	18	15		

(2) 学校位置図



【参考】

1. 校舎等の状況

小学校名	校地面積	校舎面積	屋内運動場	校舎築後	備考
	(㎡)	(㎡)	面積 (㎡)	(年)	
六会小学校	31,598	7,906	1,598	21	仮設校舎2棟(10教室)
亀井野小学校	13,223	5,478	631	43	
天神小学校	15,300	4,028	651	39	仮設校舎1棟(4教室)
石川小学校	14,508	6,435	948	26	H11増築(8教室)
六会中学校	27,689	8,818	2,290	11	R2屋内運動場改築

2. 通学距離

<小学校>

- ・本地区には、六会小学校・俣野小学校・亀井野小学校・天神小学校・石川小学校と5つの学校が設置されており、六会小学校の通学区域は東西に約1.4km、南北に約2.3km、俣野小学校は東西に約2.0km、南北に約2.1km、亀井野小学校は東西に約1.9km、南北に約2.3km、天神小学校は東西に約1.8km、南北は約1.7km、石川小学校は東西に約1.2km、南北は約1.5kmとなっている。

<中学校>

- ・本地区には、六会中学校が設置されており、六会中学校の通学区域は東西に約3.8km、南北に約4.0kmとなっている。

3. 道路、交通、土地利用状況

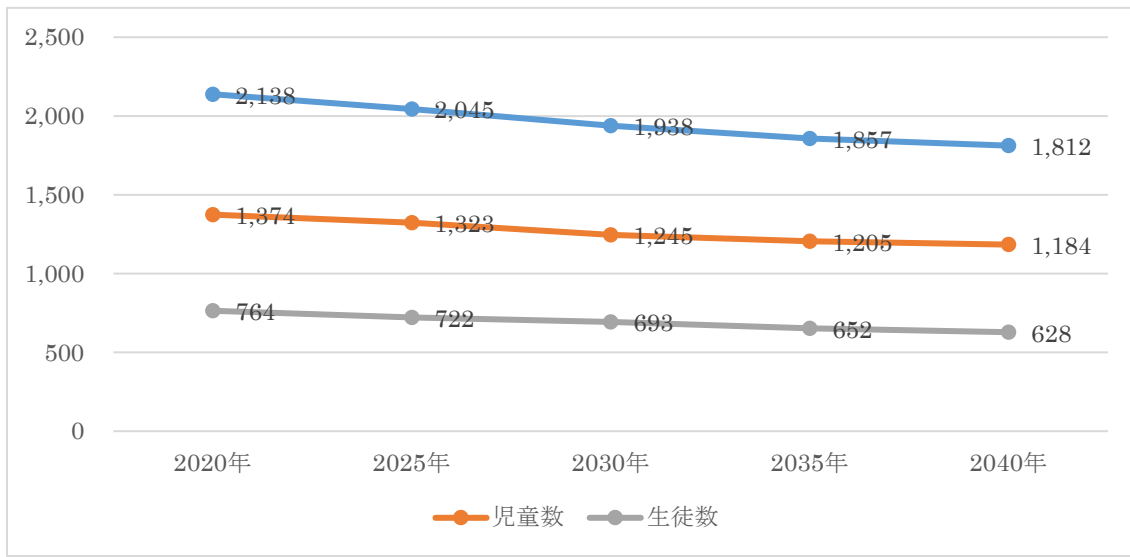
- ・都市計画道路の整備状況を見ると、地域の東西を連絡する亀井野二本松線の引地川から、小田急江ノ島線の横断部周辺と、地域の南北を連絡する善行長後線の一部区間などが未整備となっている。
- ・地区内を小田急江ノ島線が縦断しており、通行できる箇所が限られている。
- ・地区の南部は市街化調整区域であり、農地が広がっている。北部については、駅周辺や国道沿道を除き、低層住宅地が広く形成されている。

4. 自治会

- ・自治会との関係では、仲原自治会において、六会小学校と湘南台小学校、西俣野中自治会において、俣野小学校と亀井野小学校、石川山田自治会において、天神小学校と石川小学校、桜ヶ丘自治会において、六会小学校と天神小学校、新田自治会において、天神小学校と善行小学校、俣野小学校と亀井野小学校に通学区域が分かれている区域がある。
- ・自治会との関係では、西俣野中自治会において、六会中学校と大清水中学校、石川山田自治会において、滝の沢中学校と六会中学校、亀井野上町内会・円行東自治会・不動ヶ丘自治会・旭ヶ丘町内会において六会中学校と湘南台中学校、新田自治会において六会中学校と善行中学校に通学区域が分かれている区域がある。

湘南台地区

1. 将来人口推計（児童・生徒・合計）

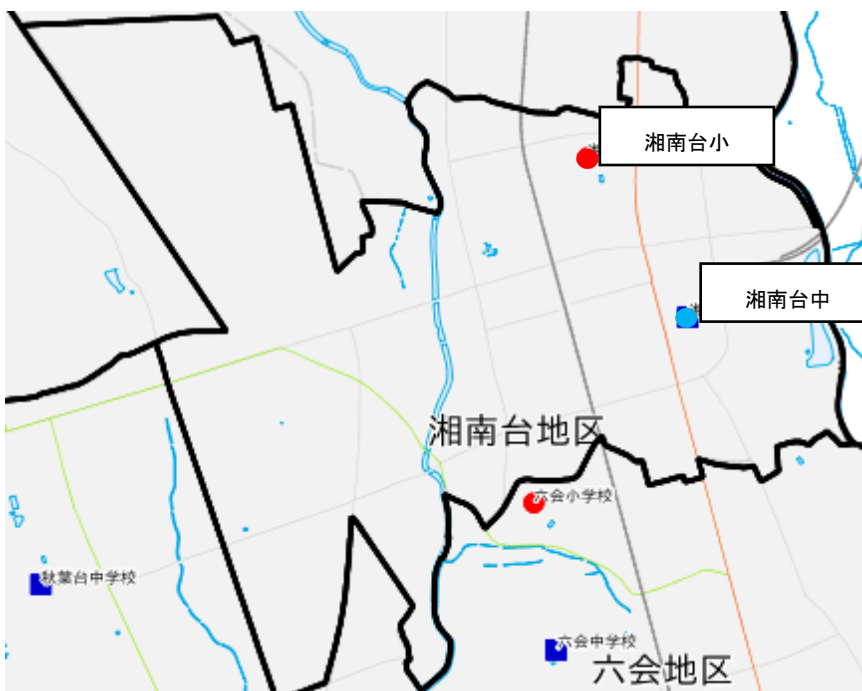


2. 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2020年	2030年	2040年	状態	備考
湘南台小	27	24	24	24		
湘南台中	20	15	17	15		

(2) 学校位置図



【参考】

1. 校舎等の状況

小学校名	校地面積	校舎面積	屋内運動場	校舎築後	備考
	(㎡)	(㎡)	面積 (㎡)	(年)	
湘南台小学校	19,870	5,972	632	48	
湘南台中学校	21,443	6,613	789	39	

2. 通学距離

<小学校>

- ・本地区には湘南台小学校が設置されており、湘南台小学校の通学区域は東西に約1.4km、南北に約1.8kmとなっている。

<中学校>

- ・本地区には、湘南台中学校が設置されており、湘南台中学校の通学区域は東西に約1.7km、南北に約2.2kmとなっている。

3. 道路、交通、土地利用状況

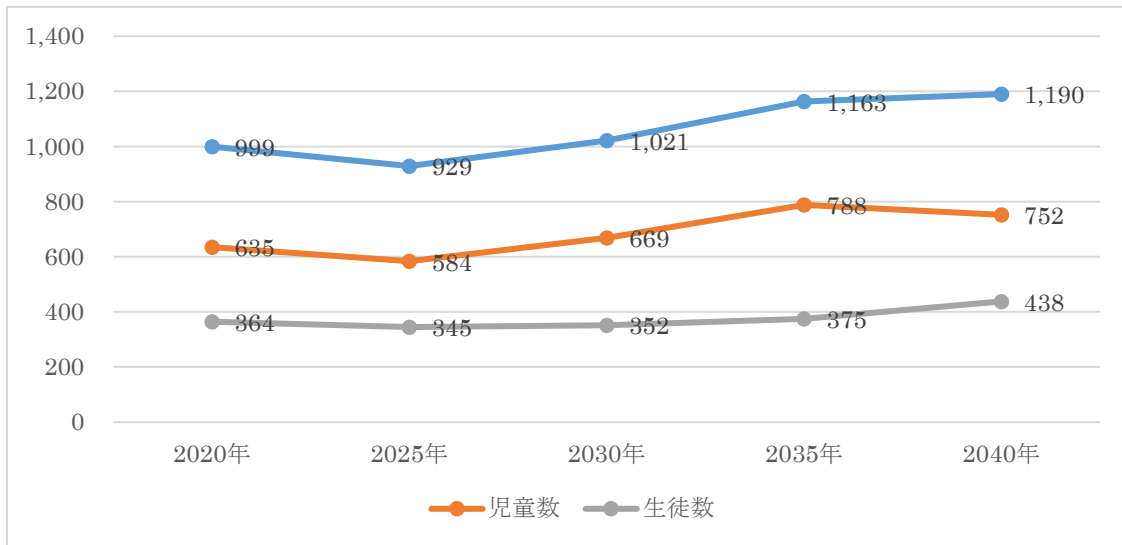
- ・都市計画道路の整備状況を見ると、湘南台駅周辺地域では土地区画整理事業などにより、都市基盤整備が行われたことから、都市計画道路の整備が進んでいる。また、隣接市や周辺地域を連絡する石川下土棚線、亀井野二本松線などの都市計画道路が未整備なことから、地域東部など地域の周辺部では、生活道路への通過交通の流入が見られる。
- ・都市計画道路の整備状況を見ると、地域の東西を連絡する亀井野二本松線の引地川から、小田急江ノ島線の横断部周辺と、地域の南北を連絡する善行長後線の一部区間などが未整備となっている。
- ・地区内を小田急江ノ島線や引地川が縦断しており、通行できる箇所が限られている。
- ・地区の西側はいすゞ自動車などが立地する工業地帯が広がっている。
- ・湘南台駅周辺は都市拠点であり、高層マンションなども立地可能な地域が一定程度広がっている。
- ・今後の土地利用状況においては、湘南台駅周辺の高層マンション計画が進んでおり、特に近年は西側での建設が進んでいるため、状況把握が必要である。

4. 自治会

- ・自治会との関係では、仲原自治会において、湘南台小学校と六会小学校に通学区域が分かれている区域がある。
- ・自治会との関係では、西俣野中自治会において、六会中学校と大清水中学校、石川山田自治会において、滝の沢中学校と六会中学校、亀井野上町内会・円行東自治会・不動ヶ丘自治会・旭ヶ丘町内会において六会中学校と湘南台中学校、新田自治会において六会中学校と善行中学校に通学区域が分かれている区域がある。

遠藤地区

1. 将来人口推計（児童・生徒・合計）

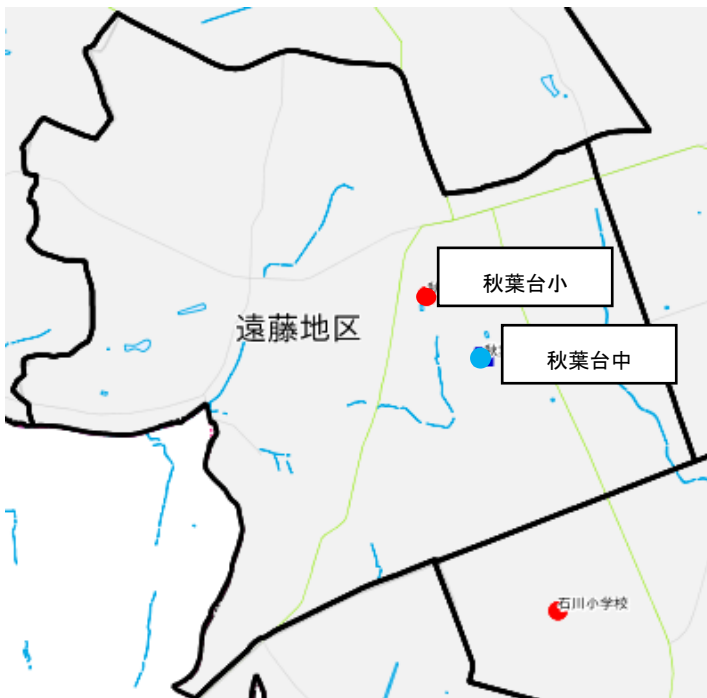


2. 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2020年	2030年	2040年	状態	備考
秋葉台小	26	20	18	24		
秋葉台中	16	11	9	12		

(2) 学校位置図



【参考】

1. 校舎等の状況

小学校名	校地面積	校舎面積	屋内運動場	校舎築後	備考
	(㎡)	(㎡)	面積 (㎡)	(年)	
秋葉台小学校	14,506	5,418	625	55	H16 大規模改修
秋葉台中学校	16,529	5,130	653	44	

2. 通学距離

<小学校>

- ・本地区には秋葉台小学校が設置されており、秋葉台小学校の通学区域は東西に約3 km、南北に約2.8 kmとなっている。

<中学校>

- ・本地区には、秋葉台中学校が設置されており、秋葉台中学校の通学区域は東西に約3.2 km、南北に約2.8 kmとなっている。

3. 道路、交通、土地利用状況

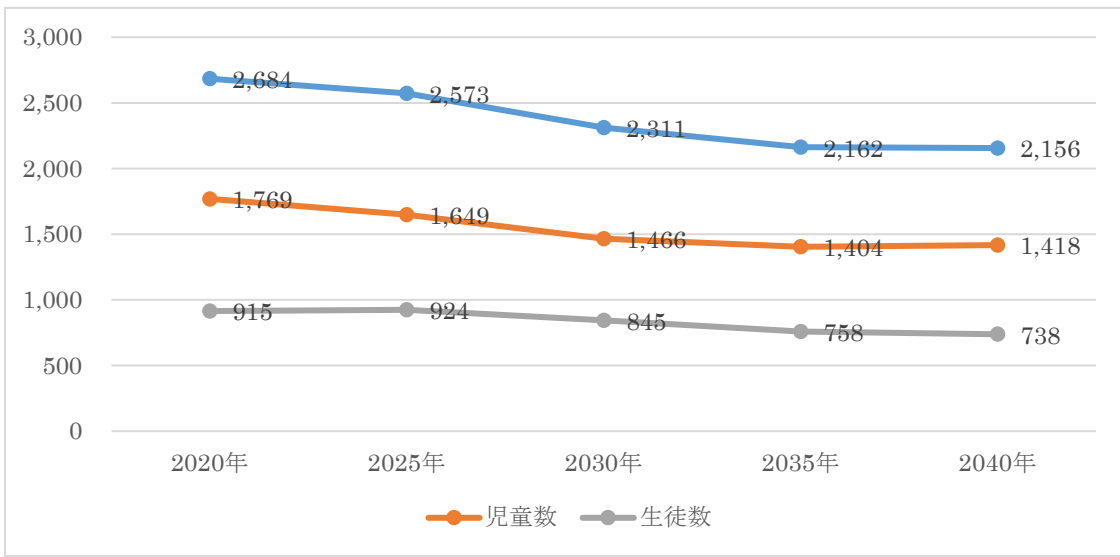
- ・都市計画道路の整備状況を見ると、遠藤地区では、土地区画整理事業などにより都市基盤整備が行われたことから、ほぼ整備が完了している。
- ・地区の東側は、区画整理により住宅地や工業地が整備されており、職住近接の土地利用がされている。
- ・鉄道駅から離れているが、バスが充実しているとともに、郊外型の商業施設も多く立地していることから、生活利便性は比較的高く、低層住宅や中高住宅が多く立地している。
- ・地区中央部は市街化調整区域だが、今後、都市拠点としての整備が進められる。
- ・今後の土地利用状況においては、慶応義塾大学藤沢キャンパスに隣接した健康と文化の森地区としてのまちづくりが人口約3,000人で進んでいくため、注視する必要がある。

4. 自治会

- ・自治会との関係では、遠藤南部自治会と石川丸石自治会において、秋葉台小学校と滝の沢小学校に通学区域が分かれている区域がある。
- ・自治会との関係では、遠藤南部自治会において、秋葉台中学校と滝の沢中学校に通学区域が分かれている区域がある。

長後地区

1. 将来人口推計（児童・生徒・合計）

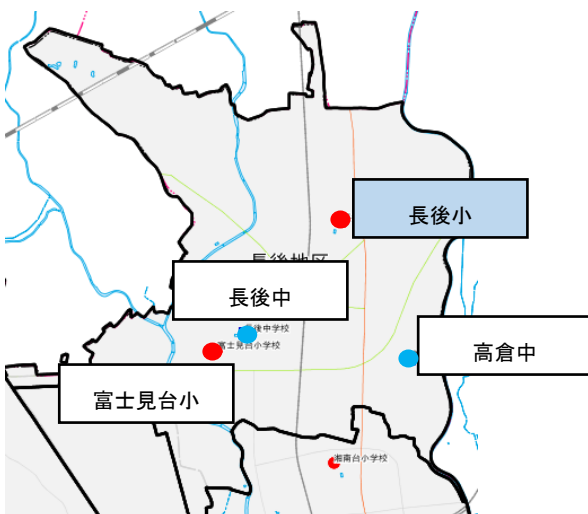


2. 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2020年	2030年	2040年	状態	備考
長後小	31	26	24	24		
富士見台小	22	20	18	18		
長後中	16	10	11	9	小規模	
高倉中	17	12	10	9	小規模	

(2) 学校位置図



【参考】

1. 校舎等の状況

小学校名	校地面積	校舎面積	屋内運動場	校舎築後	備考
	(㎡)	(㎡)	面積 (㎡)	(年)	
長後小学校	15,410	5,979	646	53	仮設校舎1棟(2教室)
富士見台小学校	13,657	5,165	626	53	
長後中学校	23,346	6,808	1,977	27	
高倉中学校	18,664	5,678	792	38	

2. 通学距離

<小学校>

- ・本地区には、長後小学校・富士見台小学校と2つの学校が設置されており、長後小学校の通学区域は東西に約1.4km、南北に約2.4km、富士見台小学校は東西に約2.2km、南北に約3.8kmとなっている。

<中学校>

- ・本地区には、長後中学校と高倉中学校が設置されており、長後中学校の通学区域は東西に約2.2km、南北に約3.8km、高倉中学校は東西に約1.4km、南北に約3.0kmとなっている。

3. 道路、交通、土地利用状況

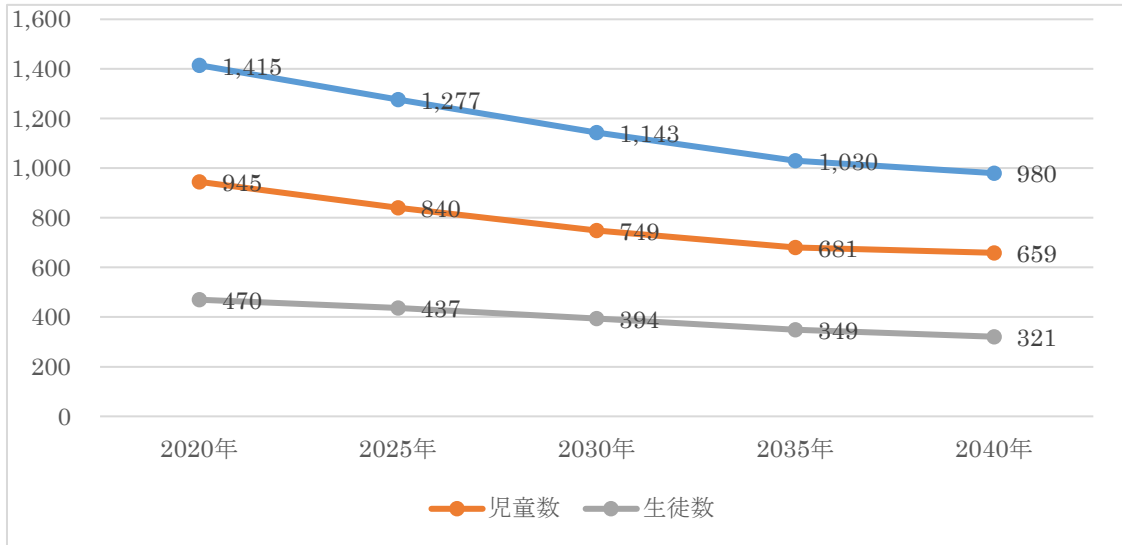
- ・都市計画道路の整備状況を見ると、高倉下長後線、善行長後線などが未整備となっていることから、小田急江ノ島線を横断する交通などが長後駅周辺に集中し、商店街の歩道がない道路などへの通過交通の流入や、交通渋滞の問題が見られる。また、地域には、狭隘道路なども多くなっている。
- ・区内を小田急江ノ島線が縦断しており、通行できる箇所が限られている。
- ・地区の東西には境川と引地川が流れており、その周辺は市街化調整区域となっている。
- ・地区の一部では土地区画整理が行われているものの、古くからまち並みが残っており、駅周辺も含め比較的低層の住宅が広く分布している。

4. 自治会

- ・自治会との関係では、四辻大塚自治会において、高倉中学校と湘南台中学校に通学区域が分かれている区域がある。

御所見地区

1. 将来人口推計（児童・生徒・合計）

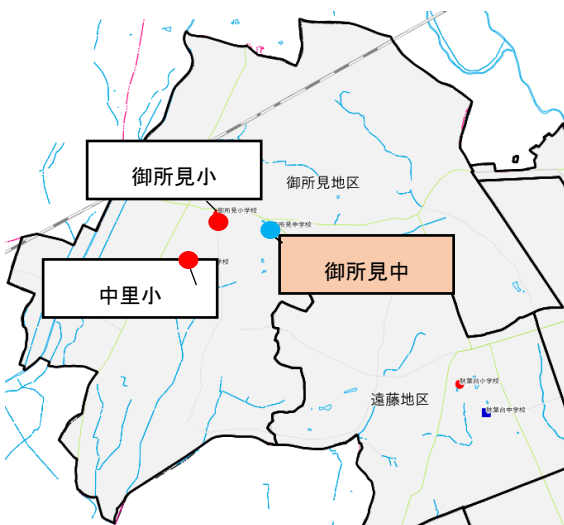


2. 地区内の学校の状況

(1) 学級数の推移

	使用可能教室	2020年	2030年	2040年	状態	備考
御所見小	22	16	12	12		
中里小	21	12	6	6	小規模	
御所見中	19	12	9	6	小規模	

(2) 学校位置図



【参考】

1. 校舎等の状況

小学校名	校地面積	校舎面積	屋内運動場	校舎築後	備考
	(㎡)	(㎡)	面積 (㎡)	(年)	
御所見小学校	16,338	5,310	627	48	H17 大規模改修
中里小学校	13,692	4,812	615	42	
御所見中学校	22,189	5,131	758	49	

2. 通学距離

<小学校>

- ・本地区には、御所見小学校・中里小学校と2つの学校が設置されており、御所見小学校の通学区域は東西に約3.5km、南北に約3.2km、中里小学校は東西に約2.9km、南北に約2.8kmと13地区内で通学区域においては最も広範囲となっている。

<中学校>

- ・本地区には、御所見中学校が設置されており、御所見中学校の通学区域は東西に約4.8km、南北に約3.9kmとなっている。

3. 道路、交通、土地利用状況

- ・都市計画道路の整備状況を見ると、未整備の都市計画道路があるが、北部第二（三）地区土地区画整理事業などにより都市基盤整備にあわせて、整備を進めている。
- ・13地区中、最も広い地区であるが、その多くは市街化調整区域となっているが、既存宅地を活用した分譲住宅等の立地もみられ、住宅が広域に点在している。
- ・横浜伊勢原線の南側の御所見小学校や御所見中学校の周辺が市街化区域となっており、市営古里住宅を含む住宅のほか、商業、工業も立地している。
- ・地区の南東部の一部は、現在、土地区画整理事業が行われており、事業の進捗に合わせて宅地供給が進むことが想定される。

4. 自治会

- ・自治会との関係では、打戻第一自治会と用田第三自治会において、御所見小学校と中里小学校に通学区域が分かれている区域がある。